海の竜騎兵３

雨宮雨彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海の竜騎兵３

【Ｎコード】
Ｎ４３２０Ｅ

【作者名】
雨宮雨彦

【あらすじ】
竜騎兵部隊に、エリート学校から研修生がやってくることになった。どうにも感じの悪い小娘だが、こともあろうに私がそのお守りをさせられることになったのだ。

1

その話を聞かされた瞬間から、私はとても気が重かった。よりによってなぜ私がそんなことをさせられるのだろうという気がした。

海軍特科学校とは海軍の幹部候補生、つまりエリートたちが通う学校で、生まれがよく、相当な有力者の推薦がないと入学試験を受けることすらできなかった。卒業後は海軍本省にそのまま採用され、出世の階段をケーブルカーのようにどんどん登ってゆくことが約束されていた。

ヒトリ国海軍はそういう世間知らずの坊ちゃん、嬢ちゃんたちによって運営されていたのだが、現場だって手をこまねいていたわけではない。エリートどもに現場の苦労を教えてやろうと何年も交渉し、やっと実現したのが、たった二週間ではあるが候補生たちに現場をじかに経験させるという研修期間だったのだ。つまりその間、特科学校の生徒たちは居心地のいい寮や校舎から引っ張り出され、設備の整っていない海岸べりや船上で潮風に吹かれ、塩分でねっとりとした床の上を歩かされることになるのだ。

今年もそのエリート候補さんが一人、竜騎兵部隊にいやいや派遣されてくることになったのだが、そのお守りを仰せつかったのがこの私だったのだ。

彼女と顔を合わせた瞬間から、私は嫌な予感がしていた。私たちはアップル大尉の部屋で引き合わされたのだが、私の表情に気がついたようでアップル大尉はじろりとこちらを見、「こいつが感じの悪いクソガキだということはオレも認めるが、おまえも我慢して、トラブルなんか絶対に起こさないようにするんだぞ」と眉を上げる

だけで伝えてきた。

ベス・チューダーはまったくその通りの小娘で、真黄色な髪に油っぽいニキビ面をして私の顔をチラチラと見ながら、バカにした表情を隠そうとはしなかった。父親が海軍大佐だから、自分も制服を着て偉そうな顔をする権利があると思っているのだろう。

それでも互いに自己紹介をし、ベスと私はアップル大尉の部屋から出てきた。このさき何をどう教え、経験させてやろうという心積もりがあったわけではない。たった二週間のことだし、私は竜騎兵なのだ。クジラの訓練ならば喜んでやるが、子守は専門外だ。

それでも私は、とりあえずベスに部隊内の様子を見せて歩いた。指揮所を出て兵舎や船着場、潜水服の整備をする工場、クジラのいるプールを連れ歩いたのだ。ベスは気がなさそうに、退屈そうな表情を隠さなかった。今日はこれだけでいいことにし、「明日は水着に着替えて来い」とだけ言って、私はベスを解放してやった。

翌朝も、ベスは同じようなふてくされた顔で姿を見せた。言いつけどおり水着を着てはいる。すぐに私は船着場へ連れていった。

竜騎兵部隊が使用する高速艇などがとめられている場所だが、私はすでにチビ介をプールから出し、自由に泳ぎまわらせていた。ゆっくりと近寄り、岸壁のきわに立っている私に向けてチビ介がピュッと水を吹きかけてきた瞬間のことだったが、足音に気づいて私が振り向くと、そこにベスが立っていたのだ。型どおり私たちは敬礼をした。

「おはようございます、少尉殿」表情や態度は別にして、ベスも言葉づかいだけはていねいだった。

「ええ、おはよう」

「今日は何をするのでしょうか？」

「これよ」

ベスに背中を向け、岸壁を離れて、私はピョンと海の中へ飛び込んだ。暑い日なので水に全身を包まれるのはとても快いが、すぐにチビ介が気づいて、でかい頭を寄りそわせてきた。その大きさを見て、ベスが呆然としているのが愉快だった。プールの中にいるときと、岸壁で目の前にするのとでは印象がまったく違うのだろう。プールには屋根があって薄暗く、しかもクジラたちは、見学者たちからは遠い場所でうずくまっていることが多い。

だが今日のチビ介は全身に太陽の光を浴び、のびのびとしている。ときどき楽しそうに身体をぐるりと回転させたりもする。口を開くと、とがったキバがずらりと並んでいるのだ。戦艦や潜水艦もたしかに巨大だが、キバまでは持っていない。

「何をしているの？　あんたも早く飛び込みなさいよ」チビ介の背中にはい上がり、私は声をかけた。

「飛び込んでどうするんですか？」ベスが口を開くことができたのは、何秒もたってからだった。

「クジラに乗って、近所をひとまわりしてこようというのよ。料金は取らないわ」

青くなっているベスの表情は、気の毒といえば気の毒だったが、私は笑いが浮かんでくるのをどうしようもなかった。父親が大佐で

あろうが提督であろうが、ここでは通用しない。

もちろんベスは飛び込もうとはしなかった。チビ介の背中をくすぐりながら、私はもう一度声をかけた。「怖がることはないのよ。クジラは大丈夫よ。怒らせないかぎり、少しも恐れる必要はないわ」

「でも…」

ため息をつき、私は別の方向を向いた。知った顔の兵がいて、岸壁の上をたまたま通りかかったところらしいが、立ち止まってベスと私のやり取りを面白そうに眺めていたのだ。

「サムズ上等兵」私は声をかけた。

「はい」サムズは気をつけをし、さっと敬礼をする。

私はベスを指さした。「その特科学校のお嬢さんを海に突き落としなさい」

無表情を装(よそお)っていたサムズの顔いっぱいに、意地悪そうな笑いが広がった。「本当にいいのでありますか？」

「力いっぱいやりなさい」私は両手で背中を押すしぐさをした。

「何するのよ！」ベスは逃げ出しかけたが、すぐにつかまってしまった。

「すまんな、中等兵」サムズはまだニヤニヤ笑っている。「少尉殿の命令なんだ。うらまないでくれよ」

悲鳴を上げながら、ベスは水の中へ落ちていった。しりもちをつくような形で派手に水しぶきを上げた。面白そうにチビ介がまばたきをした。

合図を送ってチビ介をさっと近寄らせ、私はベスを引っ張り上げてやった。泳ぎがうまくないのか、ベスはゼンマイ仕掛けの人形のように水をかき回すばかりだ。何かにつかまることができてほっとした顔をしたが、それがクジラの背中であることに気づき、とたんにギョッとした表情に変わった。

「マッコウクジラの背中へようこそ」にっこりと笑って、私は声をかけた。

2分後には、チビ介は港外へ向けて軽々と波をかき分け始めていた。海に落ちてもよいように、クサリを使って水着の腰の部分をとめてやったのに、それだけでは安心できないのだろう。チビ介の胸には太いベルトが渡されているのだが、まるで命綱（いのちづな）であるかのように、ベスはそれにしがみついている。チビ介の呼吸口のそばには箱のような形をした金属製の機械があり、本来は竜騎兵の潜水服とクジラをつなぐためのものなのだが、今はイス代わりにして、私はそれに腰かけていた。

高速艇や物資の輸送船、修理のためにドックへ入ろうとしている潜水艦の間を通り抜けて、私たちは港の外へと走り続けた。元は入り江だったのを利用した港で、それほど広々としているわけではないので、常に交通整理が行われている。外海へ通じる出入口には灯台船が浮かび、道路の交差点と同じように青や赤のランプを点滅させて、船を動かしたり止めたりしている。

しかしそもそも竜騎兵のための港なのだから、クジラに最大の優

先権が与えられていた。だから私たちは足止めされることも道を譲らされることもなく、スムーズに通り抜けることができた。部隊長が乗った高速艇ですら、私たちのためにはしへ寄って減速しなくてはならないのは愉快な眺めではあった。

そのまま私たちは外海へ出ることができたのだが、風も波も静かでとても穏やかな日だった。沖へ出ると航路を外れるので、誰にも邪魔をされることはなかった。振り返ると、ベスはまだベルトにしがみついている。できるだけ身体を揺らさないようにチビ介はゆっくりと泳いでいるのだが。

「少尉殿」とうとうベスが声を上げた。「いったいどこまで行くのですか？」

「このまま外国まで行ってもいいわよ。パスポートは持ってきた？」

だがベスはにこりともしない。顔を上げ、私をにらみつけ始めたではないか。私は続けた。

「にらまれたって怖くなんかないわ、ベス」

「こんなところへ連れてきて、私をどうしようというんです？」

私はゆっくりと首を横に振った。「どうもしないわ。本当に近所の海をひとまわりしようというだけよ。学校を卒業して本省に入れば、いつかあなたも竜騎兵部隊を指揮したり、作戦命令を下す立場になるかもしれないわ。竜騎兵とはどんなものか知っておくのも邪魔にはならないでしょう？」

「クジラのことはもうよくわかりました、少尉殿」ベスはチビ介の

背中を憎々しげにペチンとたたいた。

「その少尉殿というのはやめましょうよ。私のことはジャネットと呼びなさい。大して年も変わらないんだし、数年後には私のほうがあなたに敬語を使うことになるだろうしね」

私たちの会話が理解できるはずはないが、いつの間にかチビ介はすっかり速度をゆるめ、もうほとんど漂っているといってもいいほどだ。好奇心の旺盛(おうせい)なカモメが二羽、私たちの上空を旋回している。

「私を買収しようとしたって無駄です」突然ベスが言い出した。

「どうして？」意味がわからず、私は目を丸くするしかなかった。

「竜騎兵部隊は役立たずの金食い虫だというのは、本省では常識です。父がそう言っていました。しかるべき地位に着いたら、私は竜騎兵部隊の廃止を検討するつもりです」

「だから私が買収を試みているとあんたは思っているの？」

「違うんですか？　何がおかしいんですか？」

私がクスクス笑い始めたので、ベスは不審そうな顔をしている。背中の上で何が起こっているのだろうとチビ介も関心を持ち始めているようで、胸びれをクルリと大きく動かした。ベルトを足がかりにして水中へ降り、私は目の後ろをなでてやった。グレープフルーツほどの大きさのある目玉を動かし、チビ介は私と視線を合わせた。背中の上へ戻ろうとすると、胸びれを伸ばして手伝ってくれた。

背中の上にあがって、ベスの様子がおかしいことに気がついた。

ついさっきまで私をにらみつけていたのが、今ははるかかなたの水平線に目をこらしているのだ。チビ介からは右手の方向になる。額の上に手をかざし、じっと見つめているのだ。

「どうしたの？」私もその方向を眺めた。

「あそこに何かが見えます」ベスは指さした。「2時の方向。水平線ぎりぎりのあたりです」

大きくかさばる装備を持ち歩くことができない竜騎兵のために開発されたので、小さくおもちゃのようなものでしかないが、私は双眼鏡を取り出し、その方向を眺めた。たしかに何かがいるようだ。

白い色をしたものだ。だが雪や紙のような白さではなく、砂のようにわずかに茶色がかっている。波を起こしながら水面近くを進み、ときどきチラチラと長い身体を見せるのだ。そうやって背中を見せ、再び水面下へ姿を消す瞬間には、まるで巨大な車輪が波のすぐ下で回転し、そのへりのごく一部分だけを見せているのだという錯覚におそわれる。だがもちろんあれは車輪ではない。クジラだ。

「あれは何です？」ベスは不思議そうな顔をした。

「クジラだわ」私は答えた。「あの白い肌には見覚えがある。トーマスだわ」

「トーマス？　竜騎兵部隊のクジラなんですか？」

「ええ」そう答えながらもう私は黒い肌に触れて、チビ介に指示を出し始めていた。とたんに泳ぐ方向が変わり、でかい体がぐらりと揺れたので、ベスが小さく悲鳴を上げかけた。

私は説明を続けた。「たしかにトーマスは竜騎兵部隊のクジラだけど、猫をかぶっていて、普段はとてもおとなしいのよ。でもそれは見かけだけ。本当はとても意地悪で危険で陰険で、少しでもすきを見せると、突然乗り手を攻撃してくるの」

「攻撃って？」

「身体を揺らして振り落とそうとしたり、水中の岩にわざとぶつけたりするわ。誰が乗っているのかしら。プールの外へ出すことは禁じられているのに」

「誰かが乗っていましたか？　私には見えなかったけれど」

「今、背中の上にちらりと人影が見えたわ」

「でも禁じられているのでしょう？」

「竜騎兵部隊の中にも、自分だけは特別の能力があって、どんなクジラでも乗りこなすことができるとうぬぼれているバカがいるのよ。トーマスはそういうバカがやってくるのを待っているの」

「そんなクジラを、なぜ飼っておくんですか？」

「なぜかは知らないわ。海に放してしまおうと私たちは何度も進言したのだけど、司令部は首を縦に振らなかった。その結果がこれだわ」

「どうするんですか？」

「しっかりつかまりなさい。今から追跡するわ。あの竜騎兵を助けなくてはならない」

「助けるって？」

「あの竜騎兵は潜水服を着ていた。でもトーマスのベルトにつかまっている様子はなかった。腰のクサリで引っかかっているだけで手足はだらりとし、力がなかった。きっと意識がないのだと思う。トーマスめ、何かにわざとぶつけて気を失わせたのよ」

2

追跡が始まった。ベスと並んで私もベルトにつかまり、チビ介に命じて速度を上げさせた。ちらりと見ると、ベスの表情からも緊張が伝わってくる。あのふてくされたような顔つきはもうない。これが緊急事態だということがわかっているのだろう。

「これからどうするの？」ベスが口を開いた。

「わからないわ。とにかくトーマスを見失わないようにしないと」

「誰かに連絡したほうがよくはない？」

「もちろんしたいわ。でも方法がないのよ」

「無線機はないの？」

「クジラの背中にそんなものがあるもんですか。塩水をかぶって、いっぺんに壊れてしまうわ」

「じゃあどうするの？」

「航行中の船を見つけて、司令部への伝言を頼むしかないわね」

「船なんか一隻も見えないわ」

「そうね」ベスと同じように背伸びをして、私も見回した。波の上には青い空があり、ロールパンのように丸く真っ白な雲がいくつか浮かんでいるが、目に入るのはそれだけだ。船の姿など一つもない。

「船を見つけても、小さな漁船だったりしたら無線機を積んでいないかもしれないわ」ベスが言った。

「それはそのときのことよ。船員には口で説明するよりも、手紙を渡すほうがいいわ。時間が節約できるもの。私たちはトーマスの追跡を続けなくてはならないわけだから」

目をこらすと、前方には今でもトーマスの姿が見えている。二百メートルほど先だが背中を見せ、白い波を起こしている。背中を大きく水上に突き出すたびに、呼吸口から伸びる空気パイプと潜水服と、ぐったりと動かない竜騎兵の姿が目に入る。

ベスが口を開いた。「あのクジラはなぜ潜水してしまわないの？そのほうが簡単に姿を消すことができるはずよ。潜水服がないから、私たちは潜水できないわけだし」

「その理由は見当がつく気がするわ」

「どうして？」

「その前に通信文を書いてしまいましょう。船影が少しでも見えないか、あんたはまわりを見張っててよ」

「トーマスを見てなくていいの？」

「それは大丈夫よ。チビ介には、ずっとあとをついていくようにと指示が出してあるから」

「へえ」

腕を伸ばし、私は道具入れのフタを開けた。チビ介のベルトに作りつけてあるポケットのようなもので、大きなものではないから小道具しか入れることができないが、すぐに油性ペンと防水紙を取り出すことができた。

「私が書く」

ベスの声が聞こえたので、私は手渡してやった。何にでも手を出したがる好奇心の強さに子供っぽさを感じて、思わず微笑まないではいられなかった。ベルトにつかまりなおし、トーマスの背中を見つめながら私は通信文を作り、ベスは書きとめていった。

緊急事態の発生を海軍司令部へ通報されたし。
竜騎兵部隊所属のクジラ、トーマスが竜騎兵一名を乗せたまま海上を暴走中。
立ち止まる気配なし。
竜騎兵は意識を失っている模様。
岩にぶつけたか、潜水服と空気パイプに損傷が見られる。
特に空気パイプは大きく裂け、気密が失われ、トーマスは潜水が不可能になっていると思われる。
現在位置は竜騎兵指揮所の北東、約２海里。針路はほぼ真東。
時刻１０時２１分。
竜騎兵部隊所属、ジャネット・スミス少尉。

私が口を閉じると、すぐにベスが言った。「私の名前も書き加えていい？」

「もちろんいいわよ」

真剣な表情で手を動かし始め、ベスは通信文の末尾に自分の名を付け加えた。

不意に方向を変え、チビ介がトーマスから離れる気配を見せたとき、ベスはひどく驚いた様子だったが、私には予想していたことだった。

「どうなってるの？　トーマスから離れていくわ」

「いいのよ」背伸びをし、私は前方を見回した。

「どうして？」

「チビ介には『音源を探せ』という指示も出しておいたの」

「音源？」

「水中で大きな音を出している物体よ。水は音をよく伝えるし、クジラはとても耳がいいから、何キロ離れていてもちゃんと聞きつけるわ」

「他のクジラの鳴き声とか？」

「そういうこともあるけれど、ほとんどの場合は船よ。ゴーゴーいうエンジンの音、水をかき回すスクリューの甲高い音とかね」

「じゃあチビ介は船を見つけたの？　でも何も見えないわ」私の双眼鏡を手に取り、ベスは勝手に使い始めた。

「まだ水平線の向こうに隠れているのだと思うわ。もうすぐ見えてくるはずよ」

「トーマスのことはどうするの？」

「船を見つけて通信文を手渡したら、とんぼ返りしてまた追い続けるわ。やつは潜水できないのだし、重い潜水服を着た竜騎兵を引きずっているのだから、水中でも派手な音を立てているのだと思う。追いつくのは難しい仕事ではないわ」

双眼鏡を使いながら、最初に船を見つけたのはベスだった。大きな声を出し、私の腕をつついた。「あそこにいる。空に煙が見えるわ」

「どんな船？」そう答えたが、私は顔を上げはしなかった。波の上に身体を乗り出し、見上げているチビ介と目を合わせたのだ。ちゃんと船を見つけてくれたごほうびに、かがんで肌をそっとなでてやった。

始めは煙突からたなびく煙だけだったのが、すぐに船体も水平線のむこうに姿を現した。長い大きな船だ。船体は黒く塗られているが客室部分は白く、４つある煙突に金色の縁取りがあるところなど、どことなく紳士風で上品な感じだ。大洋を横断して二つの大陸を結ぶ高速客船なのだろう。船籍を示すヒトリ国の旗が船尾にかかげられている。

速度を落とし、私はチビ介を船と平行に走らせた。船体が起こす波に巻き込まれないように、十分な距離をとらせた。私たちの姿を見つけ、乗客たちがもうデッキに集まり始めている。

「アホーイ」立ち上がり、私は大きく両手を振った。「アホーイ」

そんなつもりはなかったのに、乗客たちは手をたたき、歓声を上げた。子供らなどは手すりにしがみつき、口をぽかんと開けてチビ介を眺めている。大人たちも面白そうに見下ろしている。いったい何人いるのだろう。重さがかたよって船が傾くのではないかと思えるほど、あっという間に窓もデッキも鈴なりになった。

「アホーイ」私はもう一度呼びかけた。制服を着た船員の一人とやっと目が合った。乗客たちの間から身を乗り出し、口を大きく開けて何かを言っているのだが、もちろん聞こえはしない。私は身振りをし、へさきを指さした。あそこなら人がいなくて静かだろう。

大きくうなずき、船員が駆け出すのが見えた。私も指示を出し、チビ介をへさきへと進ませた。

乗客をかき分けながらだから時間がかかったのだろう。私たちがへさき近くで待ちかまえていると、やっと船員が数人姿を現した。私は再び立ち上がり、手紙を入れた通信筒を見せた。大きなものではなく、私のひじから先ほどの太さと長さしかないが、薄い金属板で作られ、水が入らないように密閉されている。水に落ちても沈んでしまうことがないように、木製の浮きも取り付けられている。頭の部分には針金でできた輪があり、ロープを通すことができる。

すぐに意味に気づき、船員たちはロープを投げ落としてくれた。何度か失敗したが、とうとうベスがうまく受け止めてくれた。私が通信筒を結びつけると、船員たちはロープを引き上げにかかった。

だが私たちは、船員たちが通信筒を手にするまで待っているわけ

にはいかなかった。すぐにチビ介に指示を出し、トーマスの追跡に戻ったのだ。波をかき分けながら船のそばを離れ、チビ介は自信のある様子で速度を上げた。

客船からの返事があったのは、その姿が背後にかなり小さくなるころだった。ボーッという汽笛が何度か聞こえ、「了解した」という意味の信号を送ってきてくれたのだ。ほっとして、ベスと私は顔を見合わせることができた。

15分もかからずに、私たちは再びトーマスの姿が見える場所まで戻ることができた。あまりにも簡単に追いつくことができたので、ベスは不思議そうな顔をした。

「トーマスはなぜあんなにゆっくり泳いでいるの？　私たちをからかっているのかしら」

「ううん」私は首を横に振った。「そうじゃないと思うわ」

「なぜ？」

目の前に片腕を上げ、それをクジラに見立てて、私は説明を始めた。

「これがトーマスの身体ね。ここにこうベルトがあって、竜騎兵が左側にいる。竜騎兵を振り落とすため、トーマスは海中の岩か何かに思いっきりぶつけたのだと思う。ガツンとね」

「ろくなやつじゃないわね。もっと早くに放してしまうべきだったのよ」

「ところが岩にぶつけようとして、なぜかカンが狂った。とっさに気づいて竜騎兵がよけようとしたせいかもしれないけれど、トーマ

スは思ったよりも激しく岩にぶつかることになってしまった」

「いい気味よ」

「おかげで竜騎兵は気を失い、空気パイプが損傷し、トーマスは左の胸びれを骨折した」

「本当に？」ベスは目を丸くした。

「たぶんそうだと思う。おかしな泳ぎ方をするもんだとさっきから気になっていたの。左の胸びれがほとんど役に立たなくなっているんだわ」

「自業自得（じごうじとく）だわよ」

「そうかもしれないわね。でも私としては、あの竜騎兵を救い出すことさえできれば、トーマスのことはどうでもいいわ」

「港へ連れてかえって、罰を与えないの？」

「どうやって？　ロープをつけて引きずって戻って、おしりをペンペンする？　だめよ。もうトーマスはこのまま海に放してやるしかないわ」

「あの竜騎兵はどうやって助けるつもりなの？」

「わからないわ」

赤道から遠くはないということもあるが、ヒトリの海は冬でも暖かい。南の海から暖かい海流が直接やってきているというのがその

理由だが、よいことばかりではない。海流は南の海からやっかいなものを運んでくることがあるのだ。私もそれを心配していなかったわけではない。しかしそれが現実になりつつあると悟ったのは、こうやってベスと話しているときだった。最初に気づき、ベスが声を上げた。

「ねえ、トーマスのすぐ背後にもう一匹別の何かがいるように見えるのだけど、目の錯覚かしら」

双眼鏡を取り出し、私は前方を眺めた。ベスの言うことが事実だとわかり、思わずため息が出た。

双眼鏡を目から離し、私はベスの顔を見た。驚かせたりおびえさせたりしないためには、どういう伝え方をすればいいだろうと考えた。だがあきらめ、私は口を開いた。

「ベス、あれはサメよ」

「サメ？」

ベスの反応は想像していたとおりのものだった。チビ介の背中の上にいることにもすっかり慣れ、日差しと興奮のせいで紅潮していたのが、いっぺんに青くなった。瞳も思いっきり小さくなってしまっている。

「サメ？」ベスは繰り返した。

「南の海からやってきた大きなやつだわ。本来このあたりにはいない種類ね。そいつが今、背後からトーマスに近寄ろうとしているんだわ」

「私たちは大丈夫なの？」

ベスが腕にしがみついてきたので、私は力を込めて引きはがさなくてはならなかった。「大丈夫よ。サメはトーマスをねらっているのだから。胸びれのキズから出血しているのだと思う。その血の匂いを追ってきたのね」

「私たちを襲ってはこない？」

「こないと思うわ。ケガをして弱っている相手をねらうというのがサメのやり方だから」

「卑怯なやつね」

「その卑怯さのおかげで、私たちは目をつけられないですんでいるのよ、ベス。さあ、私が今から言うことをよく聞きなさい」

といっても、私にも名案があったわけではない。ただ何かしなくてはならないと思ったから口を開いただけだ。だが幸いなことに、あるアイディアが私の頭の中で形作られつつあった。

相談をすませ、私たちは準備に取りかかった。ちらりと見回したが、海にも空にも援軍の姿など影もなかった。道具箱を開けて信号銃を取り出し、私はベスの手に押し付けた。ベスは受け取り、ポケットの中にしまった。その後も私は手を動かし続けた。

あとを追い、ねらいを定めていたサメがトーマスに襲いかかる気配を見せたのは、このときのことだった。トーマスのやわらかい腹部にかみ付いたのだろう。サメの姿が水中に消え、前方から流れてくる波にわずかではあるが赤い色が混じり始めたのだ。

私たちの耳には聞こえないが、トーマスが上げる悲鳴が聞こえたのかもしれない。チビ介が身体をふるわせ、この場から離れたがっているように見えた。私がチビ介の立場だったとしても、あの大きさのサメが相手では同じように感じてしまうだろうと思う。だがもちろん、あの竜騎兵を見捨てるわけにはいかなかった。

このころには、私は道具箱から取り出した部品を組み立て終えていた。正式には棒状捕獲装置（ぼうじょうほかくそうち）と名づけられていたが、竜騎兵たちは単に『ヘビ取り棒』と呼んでいた。その名のほうがはるかに似つかわしかった。

ヘビ取り棒と聞いて、あなたはどんなものを想像するだろう。長い棒の先にヒモ状の輪がついたもの？　そう、それが本当に正しい姿なのだ。まったくいやになってしまうが、これも竜騎兵部隊の正式装備の一つだった。

体は小さいが強い毒をもつ海ヘビがヒトリ近海には生息しており、漁師などにときどきかまれる者がでる。かまれると治療のために血清が必要になる。その血清を作るための研究がある場所で行われているのだが、なかなかはかどらず、研究者たちは苦労しているそうだった。その理由というのが「生きのいい海ヘビの現物がなかなか手に入らない」ことなのだそうで、ならば「日ごろから海中をうろついていて、海ヘビに出会う機会も多いであろう竜騎兵に捕獲（ほかく）係をやらせよう」ということになり、こういう道具が支給されたわけだった。

本当に竜騎兵とは海軍の中の『何でも屋』だと思う。相当な理由がない限り、見かけた海ヘビは必ず捕まえて研究所へ送ることが義務付けられていた。

クジラの感覚とはなんと敏感なのだろうと不思議な気がすることがある。黒い分厚い皮膚を通して、背中の上にいる私たちの緊張や興奮、使命感のようなものが伝わったのかもしれない。まだ指示を出してもいないのに、チビ介が不意に速度を上げたのだ。ベスと私の身体にぶつかる波のしぶきが大きく高くなる。

ちらりと振り返ると、まるで船が通ったあとのように、白い波が水の上にずっと続いている。見える限りどこまでも、ほぼまっすぐに伸びているのだ。トーマスにはどこか決まった目的地があり、そこをめざしているのではないかという気分に不意に襲われた。

だが私には、そのことを深く考えている余裕はなかった。私たちはすでにトーマスのすぐそばまでやってきていたのだ。サメを振り切ろうと激しく動く白い尾びれがすぐそこにある。

チビ介が突然サメに体当たりを食らわせたとき、私たちはとても驚いた。振り落とされそうになり、ベルトにしがみついたほどだ。ベスは私の腕を強くつかんでいる。

チビ介がもう一度体当たりをした。トーマスの腹部にかみ付き、肉をちぎりとろうとしていたのだろうが一旦(いったん)あきらめ、いかにも腹立たしそうにサメがアゴを開くのが見えた。とたんにトーマスの血が再び水中に広がったが、思ったほどの量ではない。

クジラの肌は分厚く強く、少々のことで引きちぎられるものではない。その皮膚の下にはこれまた分厚い脂肪層があり、時には厚さ６０センチにもおよぶのだが、筋肉とは違ってその中を流れる血液の量などしれている。いってみれば、トーマスの機関室はまだまったく健在だということだ。

マッコウクジラは深海千メートルの圧力に耐え、大きさが１０メートルを越えるイカを生きたまま丸のみにし、巨大な筋肉の塊をヨロイのように分厚い脂肪層で守っているのだ。おまけに脳は人間よりも大きい。そういう怪物にケンカを売るなど、私だったらまず考え直すことだろう。

だがサメは、空腹を満たすことしか頭にない生物だ。相手が誰であるかというような細かいことには関心がないのだろう。

水面を破り、サメの尾びれが波の上にグイと突き出すのが見えた。ヨットの帆のように優雅な三角形をしているが、美しさに感心している暇はなかった。パタンと倒れるようにして、その背びれが再び水中に消えたのだ。私たちからは遠い側へ見えなくなったから、その意味するところは明らかだった。

サメは、チビ介にむかってその腹部を向けたのだ。当然その口もチビ介の側を向くことになる。トーマスのことはほっておき、サメはチビ介や私たちへと矛先（ほこさき）を変えることにしたのだ。

今から考えれば、チビ介はこの瞬間を待っていたのかもしれない。私とベスがヘビ取り棒を使って何かまともな成果を得ることができるとは、とても思えなかったのだろう。突然上下逆さまになり、チビ介は水中に潜ったのだ。すると、でかい口を開けたサメのすぐ下を行くことになる。

水にのまれてまたベスにしがみつかれたが、私はサメの顔をすぐ目の前に見ることになった。つつしみなく広げられたアゴの中に三角定規のようにとがった歯がずらりと並んでいる。折れて失われてもいいように、それぞれの歯の内側にはもう予備の歯が用意されて

出番を待っている。大きな口なのに舌がないのが奇妙な感じだ。一瞬私はさらにその奥をのぞき込む形になり、のどの左右にスリットのように並ぶエラまで目にすることになった。

だがそれも本当に一瞬のことで、口をバクンと強く閉じ、チビ介はサメの鼻先で空振りをした。かみ付くのに失敗したというのではなく、威嚇（いかく）するためにわざと派手に閉じてみせたのだろう。「こちらにもとがったキバがあるのだぞ」と見せる意味があったのかもしれない。

もちろんサメは、そんなことでひるんでくれるような相手ではなかった。だがそのこともチビ介はわかっていたのだろう。サメとトーマスの下をグルリとくぐり抜け、反対側の水面に再び背中を出したのだ。

クジラと竜騎兵がどうやって話をし、意思を通じ合っているのかと不思議に思う人もいるかもしれない。本当にクジラは、竜騎兵と言葉や思いが通じ合っているとしか思えない行動を取ることがある。だがなぜそんなことが可能なのか、竜騎兵の一人であるこの私にもわからない。そういうものだと答えるしかない。この直後に起こったことも、クジラと竜騎兵の間でときどき起こる奇妙な出来事の一つだったのかもしれない。チビ介がこの次に何をするつもりなのか、なぜか私にははっきりとわかったのだ。

手を伸ばし、チビ介と自分たちをつないでいるクサリを私がほどこうとしているのを見て、ベスは何か言おうとした。突然襲ってきた波のせいで私の耳には届かなかったが、届いたとしても悲鳴のようなものでしかなかったに違いない。

とにかく私は、自分たちとチビ介を結び付けているクサリをほど

いてしまった。もう私たちはクサリの助けなく、手でチビ介のベルトにつかまっているだけだ。そして次に私はベスの腕を強くつかみ、ひょいとジャンプしたのだ。チビ介の背中から飛び降りたのだ。

もちろんベスはあらがおうとした。だが私は力まかせに引っ張り、ベスを道連れにした。チビ介の背中を離れ、私たちは水の中へと落ちていった。今度こそベスは大きな悲鳴を上げた。

だが私たちは深く沈んでしまうことはなかった。すぐ下にトーマスの大きな身体があり、私たちは足の下にざらざらした肌触りを感じることができた。

3

ベスのクサリを手に取り、すぐに私はトーマスの胸を取り巻いているベルトにカチンととめてやった。もちろん自分のクサリも同じようにした。ベスがまたまたしがみついてきたが、顔を上げ、私は左側を向いた。そこではチビ介とサメの戦いが始まっていた。

この時点で、すでに私は数年間チビ介を相棒としていた。だがその私でもまだまだ知らないことがあるということなのだろう。サメと戦うチビ介は私の知っている人懐(ひとなつ)こくておとなしいクジラではなく、まったく別の姿だったのだ。全身の筋肉をフルに使い、するどいキバをむき出す肉食動物そのものだったのだ。

トーマスが流す血の匂いに興奮し、始めはただただ攻撃的なだけだったサメの気分が次第に変化し始めるのが感じられるような気がした。激しく波打つ水の下でチビ介とサメは追いかけあい、身体をぶつけ合い、時にはキバをたてあったのだろうが、すばやさでは劣るとはいえ、身体はチビ介のほうが何倍も大きいのだ。哺乳動物の知恵も戦いの邪魔にはならないだろう。

波のせいで私たちにはほとんど見ることができなかったのだが、もつれ合う二匹の姿は次第に遠ざかっていき、やがて深い場所まで行ったのか、とうとう何も見えなくなってしまった。

血を流しながらも、トーマスはまだ泳ぎ続けている。しがみついているベスを引きはがし、恐る恐るだったが私は水中に足を踏み入れることにした。トーマスの胸のベルトをハシゴのように使って、ゆっくりと降りていったのだ。いつサメが姿を見せるかとキョロキョロしながら。

トーマスの腹部のキズは、思っていたほどひどいものではなかった。だがやはり胸びれは骨折しているようで、波を受けてときどき揺れながら、力なく垂れ下がっている。

私は竜騎兵の姿を探した。潜水服をつなぎとめているクサリは今でもしっかりしており、人形のように手足をだらんとさせて、まるで荷物のように引きずられている。空気パイプはまだちゃんとつながっている。もちろん表面は大きく裂けてしまっているが、あのパイプは二重構造になっているから、内側さえ破れていなければ、潜水服の中にいる者の生命に異常はないだろう。

大急ぎで水をけり、ベルトにつかまり、私は水の上に頭を出した。いかにも心細そうにしているベスと目が合った。まるでそれが命綱であるかのように、ヘビ取り棒を抱きしめている。

「ジャネット」私の顔を見て、ベスは大きな声を出した。

水中で一分近く過ごした後なので息を整え、私は声をしぼり出した。「あんたはそこで見張っていて。もしサメが姿を見せたら、すぐにその棒で水をたたくのよ」

「だめよ。そんなことできない」

「その棒でサメと戦えといってるんじゃないわ。ただ水面をたたいて、私に教えろといっているだけよ。そうすれば、私はすぐに水から上がるわ」

「わかった」ベスはこくんとうなずいた。

道具箱の中をあさり、私はスパナを取り出した。なくても仕事はできるが、あったほうが早い。

「チビ介はどこへ行ったのかしら」ベスが心細そうにつぶやいた。

「今ごろはどこかでサメとチャンチャンやっているわよ。戻ってきたとき、キバが曲がっていないといいけどね。治療が面倒だわ」

「あんたはチビ介が心配じゃないの？」

ベスが不思議そうな顔をしているので、私は笑って見つめ返した。

「ケガもしていない健康なマッコウクジラにケンカを売ろうなんてのは、リュウゼン香目当ての無謀な人間か、南の海育ちの無知なサメだけよ」

「リュウゼン香って？」

「マッコウクジラの体内でできる物質なの。冷えたロウのような塊で、香水の原料になるわ。珍しいものだから、かなりの値段で取引されるのよ。だけどマッコウクジラを殺そうと思ったら、クジラ漁師でも命がけよ」

気味が悪そうにベスがトーマスの背中を見下ろし始めたので、まずいことを言ってしまったと気がついたが、もう遅かった。知らん顔をして、私は再び水に入った。

さっと取り付き、気を失っている竜騎兵の潜水服を脱がせる作業に取りかかることができた。窓ガラスからヘルメットの中をのぞきこむと、ジョーンズ伍長の顔が目に入った。もちろん竜騎兵部隊の一人で、私の部下ではなかったが顔は知っていた。元気はいいが頭

の軽いお調子者で、こいつなら腕試しにトーマスを連れ出すことだってやりかねない気がした。

ヘルメットのてっぺんをスパナでたたいてやると、ガンガンと響く音で目が覚めたのか、ジョーンズが目を開いた。ヘルメットを固定しているネジを私はゆるめにかかった。何秒もかからずに、ヘルメットを完全に取りはずすことができた。巨大なカップのような形をしているが、すぐに上下逆さまにひっくり返り、白い大きな泡を残しながら、ヘルメットは海底へむかって沈んでいった。

ジョーンズはすぐに全身を水に包まれたが、するりと抜け出し、潜水服の内部は空っぽになった。クサリと空気パイプをはずしてやると、ヘルメットのあとを追って潜水服も海の底へ落ちていった。

背中を押してせかし、私はジョーンズをトーマスの背中へあがらせた。突然現れた見知らぬ人物にベスはさぞかし驚いただろうが、ヘビ取り棒でぶん殴らないだけの分別は持ち合わせていたようだ。

私もトーマスの背中に上がり、潜水服から外してきたクサリを手渡し、腰にカチンととめさせて、ジョーンズもトーマスのベルトにぶら下がる形になった。しかしまだ残っている仕事がある。だがジョーンズを救うことに成功して、ずいぶん気が軽くなっていたのだろう。トーマスの背中の上を額まではって行きながら、私は軽口をたたくことができた。

「クジラの背中に3人乗りするなんて、聞いたこともないわ」

トーマスの額の部分には、空気パイプをつなぐための四角い接続装置がある。潜水服はすでに失われているから、いまや空気パイプは、そこに無意味にぶら下がっているだけだ。接続装置に取り付い

てレバーを動かし、私はパイプを引き抜く用意を始めた。

だが、まだパイプを引き抜いてしまうわけにはいかなかった。引き抜くとトーマスは完全に自由になり、潜水だってできるようになる。そうなるとトーマスのことだ。私たちなど見捨てて、さっさと水中へ消えてしまうかもしれないではないか。パイプの引き抜きは、もう少し待たなくてはならなかった。

しかし長く待つ必要はなかった。不意にザザッと水面をかき分けて、チビ介が姿を現したのだ。たまらなくなって、私はあとも見ずに海に飛び込んだ。ベスがまた悲鳴を上げかけたが、ジョーンズがなだめてくれたようだ。

もちろんチビ介は元気だった。身体を寄りそわせ、私をベルトにつかまらせてくれた。サメの姿がないことを確かめなかったことに気がついたが、どうでもいいことだという気もしていた。私はチビ介の目の中をのぞき込んだ。

穏やかだが、いつもと同じどこか笑っているような表情をそこに見つけて、私はほっとすることができた。ベスにはあんなことを言ったが、やはり心配していたのだろう。

波の中でチビ介の身体を調べるのは簡単ではなかったが、私は取りかかった。トーマスの隣についてゆっくり泳ぐチビ介のまわりを泳ぎ回ることになる。

傷はいくつかあったが、幸いにも大きなものはなく、出血もほとんど見られなかった。チビ介はサメを追い払うことになんとか成功したのだろう。胸びれを伸ばし、息をついている私にチビ介はそっと触れた。

傷の手当てに使う薬や道具類を取り出すために水面に顔を出したが、ベスのしぐさに気がついたのはそのときだった。ジョーンズとベスを背に乗せているのだし、ついさっきサメから手ひどい攻撃を受けたばかりだというのに、トーマスは無関心に泳ぎ続けている。そのトーマスの背中の上でジョーンズの肩をつかんで立ち上がり、空を向けてベスは信号銃を構えているのだ。どうするつもりなのだろうと思っているとベスは引き金を引き、信号弾が発射された。

信号弾は空高く打ち上げられ、はじけて大きな音を立てた。白い煙も残る。チビ介の背中にはい上がり、私も立ち上がった。近寄ってくる高速艇の姿に気がついたのはそのときのことだった。

もちろんまだまだ距離があり、水平線のそばに姿が小さく見えているのに過ぎない。だがその姿はあっという間に大きくなり、エンジンを全開にし、黒い排気ガスを吹き上げ、へさきが白い波を立てているのがはっきりと見えるようになった。竜騎兵部隊の高速艇で、無線連絡を受けて港から追いかけてきてくれたのだろう。へさきにアップル大尉がいて、こちらの様子を双眼鏡で眺めている。

すぐに私は、ベスとジョーンズをチビ介に乗り移らせた。まわりで起こっていることにはまったく無関心に、トーマスはまだまっすぐに泳ぎ続けている。あきれるという以上にひどく不思議な感じがしたが、理由は見当もつかなかった。

気がつくとアクセルをゆるめ、高速艇はへさきのハッチを左右に開き始めていた。へさきの内側には水槽が作りつけてあり、クジラを一匹丸ごと収容できるようになっている。慣れているのでチビ介はなんとも思っていない様子だったが、大きな入口を水槽の中へと入っていきながら、ベスは驚いた顔で頭をめぐらせていた。

ハッチが閉じきってしまう寸前にちらりと振り返ってみたのだが、トーマスはやはり同じ調子で海面を泳ぎ続けている。目玉を動かしてこちらを振り返るということすらおそらくしなかっただろうという気がする。気密の失われた空気パイプが接続されたままだから潜水はできないし、胸びれが折れているから速度も出せない。それでも頑固にある方向をめざしている。生物というよりは、まるで自動機械のようではないか。いったいあいつはどこへ行こうとしているのだろうという気がした。

水槽の中はあまり余裕がなく、チビ介だけで一杯になってしまう。ベスを水から上がらせ、ジョーンズに手伝わせて、すぐに私はチビ介の治療に取りかかった。アップル大尉も降りてきて、その様子を眺めていた。

チビ介の世話がすむとすぐに部屋へ呼ばれるかと思っていたが、休息を取ることをアップル大尉は許可してくれた。軽く食事をすませ、狭い船室で、おまけに昔の寝台列車のような固いベッドだったが、横になると私たちはすぐに眠り込んでしまった。

4

目が覚めてすぐに時計を見たが、１６時間近くがすぎて、すでに翌朝になっていることをすぐには信じることができなかった。だが時計がウソをつくはずはないし、窓の外には明るい朝の海が広がっていた。これまた誰にもうらやましがってもらえないような狭い食堂だったが、ベスやジョーンズと一緒に朝食をとっていると、機嫌の悪そうなアップル大尉が姿を見せた。

だからといって、何か悪いことが起こっているのではなかろうと私は想像していた。アップル大尉とはもともとこういう顔をした人なのだ。立ち上がりかけた私たちを制して食事を続けさせ、自分はカップにコーヒーをそそいで、アップル大尉は話し始めた。「まず状況を説明しておく。聞きたいだろう？」

ちらりと目を走らせたが、ベスもジョーンズも黙っているので、私が口を開くしかなかった。「はい」

「オレたちはまだ洋上にいて、トーマスの追跡を続けている。トーマスはほぼ真東にむかって、１６時間休みなく泳ぎ続けている。どこかをめざしているのは明らかだ」

「速度はどのくらいですか？」私は言った。

「昨日と変わっとらんよ。1時間に2ノットというところか。傷が痛むのかときどき声を上げるのが聞こえるが、他のクジラが姿を見せる気配はない」

ベスが不思議そうな顔をしているので、私は説明してやった。「

この船には潜水艦と同じようなソナーが備え付けてあるのよ。水中の音を聞くことができる機械よ」

ベスは納得した顔をした。アップル大尉が続けた。「まあ、それが現状ってとこだな」

「あのう」ベスが小さな声を出した。「私はいつ家に帰ることができるのでしょうか」

「それがさ」ベスのほうを向き、アップル大尉はため息をついた。「お偉方の言うことにゃ、この船はこのままトーマスの追跡を続けろだとさ」

「追跡？　トーマスがどこへ行くのか確かめるということですか？　港へ連れ戻すのではなく？　どうして？」

アップル大尉は大げさに首を横に振った。「それはオレも知らんよ。司令部は何も説明してくれん」

朝食をすませて、私はすぐにチビ介の様子を見にいった。冷蔵庫から持ってきた魚を見せて、水兵の一人がからかって遊んでいるところだったが、私の姿を見るとすぐにチビ介は声を上げ、大きくヒレを動かしたので水槽の水がはね、水兵は頭の先からつま先までびしょぬれになってしまった。

「私のクジラをからかったりするからよ」ニヤリと笑って、私は言ってやった。自分も照れたように笑い、魚を水槽の中に放り込んで、水兵は着替えを取りにどこかへ走っていった。

私たちの船はその後もトーマスの追跡を続けたわけだが、数日の

間は意外にも平穏な航海になった。風も波も静かで、私とベスとジョーンズは員数外の客のようなもので、退屈を感じることさえあったほどだ。トーマスを勝手に連れ出したことで何か言われるかとジョーンズは恐れていたかもしれないが、自分の管轄外のことに口出しをするほどアップル大尉はひまな人物ではなかった。

日に一度はチビ介を海に出し、少し運動をさせた。ベスもすっかり慣れ、自分の手から魚をやったりするようになった。

ベスと私は少しずつ親しくなっていった。話しているうちに驚いたのだが、特科学校では学生たちにいったい何を教えているのだろうという気がした。雲の形や色、種類の見分け方、天候の予測方法といったことから、海面をただよっている海草の名、ときおりマストにとまって羽根を休めている海鳥の生態など、ベスはほとんど何も知らなかった。

甲板の上で並んで風に吹かれながら、私はベスにこの高速艇のことも話してやった。この船は『ジャック・カーター号』といったが、もちろん艇長の名ではなく、もう故人だが名の知れた海軍軍人から取ったものだった。少し謎のある人物で、その人物像やエピソードには、竜騎兵訓練校に入学した当時の私も興味を持って耳を傾けたものだった。

一言で言えば、ジャック・カーターとは鬼のようにきびしい人物だったのだ。クジラを軍用に訓練するということを世界で最初に始め、竜騎兵部隊を創設したのもこの人だった。逸話はいろいろとあるが、なまけることはもちろん、クジラが休憩することさえカーターは絶対に許さず、ヒレの動きが少しでもにぶるだけで腹を立て、子クジラであろうがなんであろうが容赦なくけとばし、怒鳴りつけ、ときには電気ムチまで使って命令をきかせたそうだ。

電気ムチもカーターが発明したもので、細長い棒のような形をしているが、先端には小さな電極が二つむき出しになっている。ここに数万ボルトの電圧を発生させることができ、乗馬する人が馬のしりにムチを当てるのと同じように、カーターはこの電極をクジラの肌に押し当て、電気ショックを与えたのだ。一度使うだけで、どんなクジラでもおとなしくさせることができたそうだ。

もちろん現在の竜騎兵はこんな道具は使わない。クジラに恐怖を与えたり、いがみ合ったりしても意味がないからだ。それは誰にだって理解できることだろう。だがカーターの時代には違っていた。クジラとは、押さえつけて服従させるべき存在だと考えられていたのだ。

カーターがどこでどういう死に方をしたのかは誰も知らなかった。若いクジラの訓練のために一人で海へ出てゆき、とうとう戻ってくることがなかったのだ。その後カーターは死んだものと考えられるようになったが死体が見つかることはなく、死因も死に場所も不明のままだった。

だがそれもすべて私が生まれるよりも前のことで、竜騎兵部隊は今日でもちゃんと存在し、活動を続けている。ジャック・カーターなど今の私たちにとっては、とらえどころのない大昔の伝説でしかない。せいぜいこうやって船の名として残っているだけだ。

トーマスは相変わらず真東へと泳ぎ続けていた。私たちは何度も海図を眺めたが、その先に何があるのかは見当もつかなかった。大洋が広く平らに広がり、陸地に出会うことができるのは何千キロも先のことだ。その道のなかばあたりには海底山脈があり、砂漠のように平らに広がる海底の中央に屏風のようにそびえ立っている。

航海に変化が起こったのは、ある夜のことだった。甘やかしすぎだと思うが、ベスが家族に電報を打つことをアップル大尉は許可してやっていた。夕食を食べながら、ベスはその電文を熱心に作っているところだった。

食堂が狭く、全員が一度にテーブルにつくことができないので、朝食も昼食も夕食もすべて2班に分かれて食べることになっていた。私たちは後のほうの班で、コンロの調子が悪いとかで夕食がいつもよりも一時間ほど遅く始まっていたが、月と星のある明るい夜で、波は静かで、船のエンジンも調子がよかった。

私たちはちょうど食べ終えたところだった。ステンレス製の味気ないものばかりだが食器を目の前に置いたまま、おしゃべりを続けていた。差しせまった危険があるわけではないのんびりした航海なので、みな気も口も軽くなっていた。ジョーンズが下品なジョークを言い、ベスやアップル大尉も含めて全員が笑い転げた。船底から突然音が聞こえてきたのはそのときのことだった。

ドスンという大きな音だったので全員がビクリとし、顔を見合わせた。かすかだが船が揺れたような気もした。何か金属製の重い物体でも衝突した感じだ。

ジョーンズがとっさに腰を浮かせたのでアップル大尉は身振りをし、ブリッジへ走らせた。ジョーンズの足音が遠ざかったあとも私たちは耳をすませ続けたが、もう何も聞こえはしなかった。あれは何だったのだろうという気がした。船腹に小船でも衝突したのだろうか。

上の階や甲板を走る水兵たちの足音が聞こえはじめた。何を言っ

ているのかまではわからないが、下士官が発する命令の声もする。だがもちろん船内に浸水している様子も、エンジンが回転を落とす気配もない。本当にあれは何の音だったのだろうと思っていると、ジョーンズが戻ってきた。ドアから顔だけを出し、アップル大尉のほうを見ている。敬礼することを忘れているが、気にする者はいなかった。

「アップル大尉、トーマスが船底にぶつかってきたらしいです」

「トーマスが？」

「はい。船に被害はありません。額の接続装置が衝突したので、ああいう金属的な音がしたのだろうとのことです」

そのとき別の人物が食堂の入口に姿を見せたので、ジョーンズはさっと道を譲った。今度は敬礼することを忘れなかった。食堂の中に入ってきて、艇長はすぐにアップル大尉に話しかけた。

「アップル、おかしなことになったぞ」

「なんだい？」

「トーマスが潜水しちまったようだ」

「なんだって？」

「見張りの報告では、ぶつかってきたとき、やつの身体から空気パイプが外れるのが見えたそうだ。パイプは引きちぎられるでなく、きれいに外れたのだそうだ。ロックがかかっていなかったのかな」

私は突然思い出した。ベスとジョーンズをチビ介に乗り移らせる直前、私はトーマスの接続装置に取り付き、空気パイプを引き抜く

準備をしたのだ。もちろん引き抜きはしなかった。だがそれに備えたのだ。そのときロックを外してしまったことを、このときやっと思い出したのだ。

私の顔つきに気がついたのだろう。アップル大尉があきれた顔をした。だが私には何も言わず、艇長と話しつづけた。「そのあとトーマスはどうなった？」

艇長は肩をそびやかした。「知らんよ。潜水してそのままどこかへ行っちまった」

艇長の言葉が終わるころには、私はもう駆け出していた。意味に気づいて、ジョーンズもついてきてくれた。ベスはぽかんとした顔をしていたに違いないが、説明してやる暇はなかった。

意外なことかもしれないが、戦闘機のパイロットと同じように、竜騎兵も緊急発進をする訓練を受けている。竜騎兵とクジラがそんなにあわてて出動しなくてはならないなど、いったいどんな状況なのかと私も以前から疑問に思っていたが、こうやって役に立つこともあるわけだ。

チビ介のいる水槽のすぐ隣には、クレーンにつるされた状態で潜水服が常に用意されている。私はその中に飛び込んだのだ。ジョーンズがいるので、準備は3分もかからずにすませることができた。空気パイプをかかえてジョーンズが近寄ってゆくとチビ介はすぐに察して、水の上にいそいそと頭を突き出した。

カチンと音がして空気パイプが接続されると、とたんにチビ介の体臭の混じった空気が潜水服の中を満たすことになる。慣れ親しんだ匂いで、深呼吸をし、私は肺いっぱいに吸い込んだ。

ヘルメットをかぶるとまわりの物音が聞こえにくくなるのだが、ドタドタと駆け寄ってくるベスの足音は聞き取ることができた。そばへやってきてヘルメットに顔を近づけ、ベスはどなった。「ソナー手の話では、トーマスはまっすぐ真下へむかって潜っていったそうよ」

わかったという印に片手を上げ、私はベスの肩に軽く触れた。手袋というよりは、分厚い金属でできたまるでパワーショベルのような手だが、ベスはにっこりして指先に触れ返した。モーターの音を響かせて船のへさきが左右に開かれ、チビ介と私は真っ暗な海へと出ていった。

5

少し深く潜るだけで昼間でも自分の指先を見ることができなくなるほどなのに、夜の海であればもっと暗く、まるで黒いペンキの中を泳いでいるような気分になる。もちろんチビ介は何をすべきなのか知っていて、海底へむかってほぼ垂直に、まるで墜落でもするように降下していった。これはマッコウクジラお気に入りのやり方だから、きっとトーマスも同じようにしたことだろう。

懐中電灯をつけて、私はときどき深度計を確かめた。いつのまにか４００メートルを越えてしまっている。この潜水服は計算上は千メートルの水圧にまで耐えることができるが、余裕を見て８００メートルまで行ったところで潜水をやめることが定められていたから、私もそれに従うつもりでいた。

陸の人々が思っている以上に、海とは深いものだ。もちろん深い場所も浅い場所もあるが、全世界の海の深さを平均すると約３８００メートルになる。竜騎兵が潜ることのできる深さの４倍までいって、やっと平均値ということだ。特に大洋は深く、一万メートル以上の海溝や海淵（かいえん）が口を開けていることもある。

だが海図を見て知っていたのだが、このとき私が潜っていこうとしていた場所は大洋の中央部ではあるが、海底山脈のおかげで意外と浅いのかもしれなかった。この大洋の中央部には、地上のどの山脈よりも長く幅の広いギザギザした塊が、ヘビのしっぽのように南北に横たわっている。そういう山脈の頂上付近であれば、おそらく深度８００を大きく越えることはないだろうと私は予想していた。

だから懐中電灯を真下に向け、光を最大限に強くしたとき、その

中に何かの姿がぼんやりと浮かび上がってきても、私は特に驚きを感じなかった。深度計を見ると７００をすぎかけたところだ。チビ介と私は海底山脈の頂上部に近づきつつあるようだった。

バッテリーの電気などすぐになくなってしまうから、懐中電灯を強い光でつけっぱなしにすることはできなかった。ほんのときどきカチカチとスイッチをオンにしてみただけだ。それでも何かに接近しつつあることは十分見て取ることができる。

こうやって頭を下に向けて、チビ介と一緒に上下逆さまになって降下してゆくとき、いつも私は、地球にむかってキスをしようとしているような気持ちになる。もちろん海中では、深すぎてその地表に触れることすらできないことも多いのだが。

トーマスの姿など、私には影すら見えなかった。水中で懐中電灯の光が届く範囲など知れている。だがチビ介は、トーマスがどこにいるのかはっきり知っているのに違いなかった。クジラは耳がとてもよく発達しているし、潜水艦のソナーと同じように、人間の耳には聞こえない種類の音波を発して、それがはね返って戻ってくる具合から、まわりの物体の様子や海底の地形を判断している。もちろんその詳しいメカニズムは学者たちがまだ研究している途中であり、クジラの身体が本当はどういう仕組みになっているのか、よくわからないことも多い。

野生のマッコウクジラは、１０００メートルを越える真っ暗な海でイカを食べて生きているのだ。光の届かないそんな場所では、音波を使うしかまわりの様子を知る方法はないではないか。私の想像だが、トーマスもクジラのこの習性を利用していたのではないかという気が今となってはするのだ。竜騎兵指揮所のすぐ外からこの大洋の中央まで、姿を見失うことなくチビ介はやすやすとトーマスの

跡をつけてくることができた。

だがそれはチビ介の努力の賜物(たまもの)ではなく、トーマスがわざと音波を発しながら泳ぎ続け、チビ介をずっと誘導してきたのではないかという気がして仕方がない。

もちろん、あのときの私はそんなことなど夢にも知らなかった。潜水服を着てチビ介のベルトにつかまり、真っ暗な中の降下を続けていたのだ。

あの潜水服は竜騎兵のシンボルのようなものだ。さびにくく圧力に強い特殊な金属で作られている。ずんぐりとしたドラム缶のような形で、ヘルメットの窓ガラスは分厚く、機関車のヘッドライトのようにぎょろりと丸い。全体にごつく大きく、美しい姿ではまったくない。事実、竜騎兵たち自身も『圧力鍋(あつりょくなべ)』というあだ名で呼んでいるほどだ。だが私たちも誇りを持って身につけているのは間違いない。

もうすぐ深度計が７００をさすので、私とチビ介の旅は終わりに近づきつつあるようだった。トーマスの姿は相変わらずなく、このまま浮上して、アップル大尉には「トーマスの姿を見失ってしまった」と報告することになるのだろうなと私は考え始めていた。

懐中電灯の光の中に何かが姿を現し始めていた。もちろんトーマスではない。珍しくもなく、海中ではごくありふれたものだった。だがその巨大さと繁殖の濃さに私は驚きを感じ始めていた。海ユリという生物で、動物の一種だがイソギンチャクやサンゴのようにじっと動かず、見た目はまるで植物のように見える。形がユリの花に似ていることからその名があり、ときどき深海に密生していることはよく知られていた。

だがこのとき私の目の前に現れたのは、これまで他の海で何度も見たことのある海ユリがおもちゃに見えるほどのサイズだったのだ。ホースのように細長くやわらかい茎(くき)は長さがいくらあるのやら見当もつかず、その先端は数本の触手が人の指のように広がり、波を受け、呪文をとなえる魔法使いの手のようにゆっくりと動いている。レンガのようにくすんだ色をしているが、これが目の届く限り何万本も生えて森を作っているところは、まるで地獄の扉が開いて、亡者(もうじゃ)の群れがうごめいているかのような眺めだ。

自分でも気がつかないうちに、私はチビ介の足を止めさせてしまっていた。胸びれを軽く動かしながら、チビ介は身体のバランスを取っている。

海ユリは海底に根を下ろし、上へ上へと茎を伸ばし、水面からやってきた私たちはその頂部を見下ろしているのだった。チビ介の表情から、トーマスがこの海ユリの森のどこかにいるらしいことは感じ取ることができた。深度計を見ても８００メートルにはまだ余裕がある。だが私は、前進せよという指示をまだチビ介に与えることができずにいた。あの中へ入ってゆく決心がなかなかつかなかったのだ。海ユリの茎や触手が潜水服や空気パイプにからみついて身動きが取れなくなることを心配していたというのももちろんある。だがそれは理由の一部でしかなかった。

ナイフを取り出し、私は海ユリの一本をなぎ払ってみた。見かけ以上にやわらかく、簡単に切断することができた。手を触れるとわかるのだが、表面はとても滑らかですべりやすく、何かが引っかかることなどまずありそうになかった。万一引っかかったとしても、こうやってナイフで簡単に脱出できる。だから本当は、あの森の中に足を踏み入れない理由にはならない。

私は別の理由でためらっていたのだ。私は海ユリたちがひどく怖かったのだ。濃く分厚く生え、ほんの少し先にすら何があるのかわからない。何かとんでもないものが隠れていても、出くわす瞬間まで知ることはできないだろう。

海ユリの森の中に何かがいると思っていたわけではない。竜騎兵訓練校で習ったことから考えても、危険な生物が潜んでいるとはとても思えなかったし、チビ介も一緒なのだ。ケガをしておらず、弱ってもいないマッコウクジラに戦いを挑むものなどそうそういないだろう。先日のサメは、トーマスの血の匂いをかいで我を忘れるほど興奮していたのだ。むしろ例外的といっていい。

しかし私はどうにも気が進まなかった。足を踏み入れるのがとても恐ろしく、ためらわれたのだ。あそこに足を踏み入れないですむ言い訳を与えてくれるのであれば、敵兵の出現でさえ私は歓迎したことだろう。

だが私の願いはかなわず、ハマダラカ兵も何も現れることはなかった。バカバカしい望みとわかっていつつ、チビ介に指示を出すのを私は1分、2分と先延ばしにしていた。深度計の目盛りはまだ700と少しでしかない。「海ユリの森に出くわした時点ですでに800を越えかけていたので、足を踏み入れるのはあきらめざるを得なかった」とアップル大尉にはウソの報告をしようかとまで考え始めていた。だがトーマスが目の前に姿を現したのは、その瞬間のことだった。

何が起こったのか、最初は理解すらできなかった。海ユリの間から、突然その大きな顔をぐいと突き出してきたのだ。距離は30メートルもなかっただろう。私の身体がビクンと揺れたのは、驚きの

せいだけではなく、トーマスが巻き起こした水の動きのせいもあっただろう。

チビ介は平気な顔をしているように見えた。きっと何秒も前から耳でわかっていたのだろう。音波を発して予告しながらトーマスはゆっくりと近づき、姿を現したということなのだろうが、私の目にはそれが突然の出現とうつったわけだ。

しかしそう冷静に言えるのは今だからであり、あのときはもう少しで心臓が止まってしまいそうな気がした。いつもの訓練どおりに手を伸ばし、肌に触れてとっさにチビ介の鼓動(こどう)を感じていなければ私はパニックを起こし、何かとても愚かな行動を取ってしまったかもしれない。

竜騎兵であろうが誰であろうが、人間など海の中ではまったくの初心者に過ぎない。海中で生きる知恵に関してはクジラのほうがよっぽど先輩で、経験も積み重ねている。竜騎兵訓練校でよく聞かされたことだが、海中で何か予想外のことが起こったときには、どう行動するべきかを自分で判断しようとせず、「その出来事について相棒のクジラがどう考えているのかを探れ」という原則があり、それを私は何とか思い起こすことができたわけだった。

それがどういう出来事であったにせよ、本当に危険な事態なのであればクジラは鼓動を速め、逃げ出す用意を始めていることだろう。鼓動を速めもせず、クジラが平気な顔をしているようであれば、まあまあまり心配する必要のない事態なのだろう。

潜水服越しに手を触れても、チビ介の鼓動は速まってなどいなかった。だから私も落ち着きを取り戻すことができたのだ。

トーマスはたたずんでいた。飛行船のように長い大きな身体でじっと動かずにいるが、その目はまっすぐにこちらを見つめていた。懐中電灯の光を向け、私はその身体を眺めた。そしてあることに気がつき、今度こそ息が止まってしまいそうなほど驚いたのだ。

トーマスの左の胸びれのことだ。岩か何かにぶつけたせいで骨折し、まったく使えなくなっているのだと私は思っていた。それがなんと、今はごく普通に動いているではないか。かすかではあるがここにも水の流れがあり、オールのようにゆっくりと動かしながら身体の安定を保っている。骨折どころか、すり傷をおっている様子すらない。

これは本当にトーマスなのだろうかと眺めなおしたが、間違いなかった。白い肌をしたマッコウクジラなど竜騎兵部隊に二頭といるはずがないし、顔にも見覚えがある。額にある接続装置には、高速艇にぶつけたときに付着した赤い塗料まで見ることができるではないか。これは絶対トーマスに違いない。

私は、自分がだまされていたことに気がついた。つまりトーマスは、はじめから骨折などしていなかったのだ。骨折しているように見せかけて、私とチビ介が追跡してくるように仕向けたのだ。

むかむかと腹が立ってくるのをどうしようもなかった。チビ介といくら長く一緒にいるといっても、人間としての自負のようなものが私にもあったのだろう。「どうしてクジラふぜいに」という気がしていたのだろう。

だがその怒りも、チビ介と目が合うとすぐに消えてしまった。グレープフルーツほどもある大きな目玉だが、「どうしたの？」とでも言いたそうにまっすぐに見つめているのだ。ああいう瞳で見つめ

られて、怒りを持ち続けるのは難しい。

もちろん私はトーマスを許してやったわけではなかった。誰に聞こえるというわけではなかったが、ヘルメットの中で思わず「くそったれ」と悪態をついた。

トーマスはいったい何歳なのだろうと私は思った。きっともう50歳近いだろう。ならば私とチビ介をこんな場所にまで誘い出す知恵を備えていても不思議はない。トーマスから見れば私など、ほんのひよっ子でしかないのだろう。

クジラ同士の間ではどのくらい高度なコミュニケーションが取られているのか、学者たちの間でも意見が分かれている。「クジラは人間と同じぐらいに雄弁でおしゃべりである」という人もいるし、「せいぜい犬と同程度であろう」という人もいる。

私はもちろん学者ではないが、そのどちらにも賛成する気はない。学者たちはクジラのことを人間に似たものととらえすぎているような気がするのだ。クジラ語というものがもし存在するとしても、それは単語の構造も文法も何もかもが人間の言語とはまったく異なり、それどころか話されている話題だって人間には想像もつかないものなのではないかと思えるのだ。

チビ介は愛らしく理解しやすいクジラだが、そのチビ介ですら、頭の中で考えていることは、私が夢にも思い描くことができないようなものであるかもしれない。私がチビ介を理解し、協力し合って生きているというのではなく、チビ介が単に私に合わせてくれているだけなのかもしれない。

そんなことを、トーマスを見つめながら私は考え始めていた。

不意にトーマスが動きを見せた。体をひるがえらせ、頭を下に向けて海ユリの森の中へ潜っていこうとしたのだ。ついていくようにと、私もチビ介に指示を出さないわけにはいかなかった。

真っ暗な海の中だが、懐中電灯の光であたりを見ることはできた。だが森の中に入ると、それすら不可能になってしまった。海ユリたちに囲まれ、1メートル先を見ることだってできなくなってしまったのだ。空気パイプを縮め、手足を引っ込め、私はできるだけ小さくなった。海ユリに引っかかる可能性を少しでも減らすためだったが、その姿はまるで、チビ介にへばりつくコバンザメのようだったかもしれない。身体を密着させ、潜水服ごしにチビ介の鼓動を感じ取ることさえできるほどだった。

点灯させていても意味はないのだが、懐中電灯のスイッチを切る勇気は出なかった。分厚いカーテンのような海ユリのせいで何も見えはしないが、トーマスはゆっくりと進んでいる様子で、チビ介もそのあとをついていく。海ユリはやわらかく、チビ介の鼻先に触れてフワリと動き、機嫌よく道を譲ってくれる。とうとう私は、懐中電灯のスイッチを切ることにした。

そうやって真っ暗な中をどのくらい進んだのかはわからない。1分にも満たなかったような気もするが、もっと長かったのかもしれない。私は時計を見ることすら思いつかなかったのだ。

ついにチビ介がブレーキをかけるのを感じた。反動で私の身体が前へ投げ出されかけたからだが、森の中の旅が終わり、再び懐中電灯のスイッチを入れるときがきたように思えた。スイッチを入れ、私は光を前方へ向けた。

最初に見えたのはやはり海ユリの群れで、森の木々のように私たちを取り囲んでいる。小さな魚たちもいたが、光に驚いてさっと逃げ出し、どこかへ姿を消した。トーマスは私たちの真上にいて、目玉を下に向けて見下ろしている。思わず肌に触れてみたが、チビ介の鼓動は正常なままだ。

光を向け、私はまわりを眺めた。おびえて、ずいぶんおずおずとしていたことだろう。だが何を見せるためにトーマスが私たちをここまで連れてきたのか、すぐに理解することができた。深度計はまだ８００には達していないが、足元は岩であり、すぐ目の前に海ユリの根の部分を見ることができる。茎が指のように枝分かれして、巨人の手のようにして海底の岩をつかんでいるのだ。その根の一つに寄りかかるようにして、潜水服が一つ横たわっていることに気がついた。

ヘルメットの中で、私はあっと声を上げたに違いない。金属でできた潜水服で、ずいぶん古めかしい形をしているが、間違いなく竜騎兵のものだ。さびることのない材質なので変色はしていないが、海底の砂に半分以上埋もれてしまっている。

不安や恐怖など忘れ、チビ介のそばを離れて、私は前へと泳ぎだしていた。そばへ行き、もっと詳しく観察しようとしたのだ。

もちろん私は、この潜水服は空っぽで、何かの理由でここに沈み、だがこんな場所だから誰にも知られることがなかったのだと思っていた。手を伸ばしてそっとつついてみたが、砂のせいでピクリともしなかった。私は何気なくヘルメットの窓ガラスをこすってみた。

何年前のものか知らないが、今と違って圧力に強い丈夫（じょうぶ）なガラスを作ることが難しかったのだろう。少しでも面積を小さくすませる

ために、まるでスリットのように細いすきまを通して外を見るようになっている。当時のヘルメットは内部も狭く、さぞかし窮屈(きゅくつ)だったことだろう。あくびをするのにも苦労したと年かさの教官が話していたことを思い出す。

特に汚れてもおらず、きれいなガラスの表面がすぐに顔を出した。懐中電灯を近づけ、私は内部をのぞき込んだ。何かが見えていることに気づいてはっとしたが、その意味はわかっていなかった。意味がわかったのは数秒後のことで、大きな声を上げ、私は思わず後ろへ飛びのいた。

長い間に気密が破れ、潜水服の内側には水が浸入していたのだろう。それと一緒に微生物も入り込んだのだろうが、それらが大部分を食べつくし、あとには骨だけがきれいに残っていた。ヘルメットの内側には真っ白な人間の頭蓋骨があったのだ。

当たり前のことだが、頭蓋骨は医学の本で見るのとまったく同じ形をしていた。だがもちろん、私はそんなことに感心していたわけではない。ヘルメットの中に頭蓋骨があるのだとすれば、潜水服の中には人間の死体が一人分入っているのに違いないではないか。

今すぐ浮上して、このことをアップル大尉に知らせるべきだろうかと思った。考えをまとめるため、私は上を向いた。そして頭上にとどまり、じっと見下ろしているトーマスと目が合ったのだ。

クジラが笑うといっても、あなたは信用しないかもしれない。だが彼らはそうすることがあるのだ。ある種のイルカなどは唇を動かし、笑っているとしか思えない表情を作ることができる。もちろん人間の目には笑い顔とうつるというだけで、彼らの本当の笑いなのかどうかは知りようがない。だがあの瞬間のトーマスはたしかに笑

っていたように思う。ウフフという含み笑いだ。

突然気がついて、私は再び目の前の潜水服を調べにかかった。白骨が気味悪いなどとは言っておれなかった。砂の上にだらりとしていた空気パイプを見つけ出し、力まかせにグイと引っ張ったのだ。

現在とは違って、当時の空気パイプはヘルメットの後頭部に直接つながっていた。長い年月の間に腐食(ふしょく)が進み、ヘルメットと胴体をつなぐ部分が強度を失っていたのだろう。ヘルメットはあっけなく持ち上がり、私の足元に転がり落ちてきた。おかげで頭蓋骨がむき出しになったが、顔をそむけ、私は見ないようにしていた。ヘルメットだけを手もとに引き寄せ、調べ始めた。

悩む必要はまったくなかった。一目見るだけでわかる状態だったのだ。

空気パイプと接続するため、ヘルメットの後頭部には箱状のカバーが取り付けられていた。空気弁が勝手に閉じたり開いたりしないようにロックするためのものだが、いくらがんばっても手が届かないので、潜水服を着ている本人が直接手を触れることはできなかった。竜騎兵たちの間でジョークとして話されていたことだが、潜水中にもし誰かが悪意を持ってこの弁を閉じてしまったら、空気が届かなくなり、潜水服の中にいる者は窒息死(ちっそくし)するしかない。

だから弁が偶然閉じてしまうような事故が起こらないように、四角い弁カバーが取り付けられていたのだ。だがもう間違いなかった。この潜水服の弁カバーは強い力で押しつぶされ、弁が露出していた。そしてその弁も動かされ、本来『開』になっているはずのものが『閉』になっていたのだ。この竜騎兵は事故で死んだのではなく、誰かの手で殺されたのに違いない。

しかしこの弁カバーを押しつぶすことができるなど、どんな力の持ち主だろうという気がした。機械か道具でも使わない限り、人間の力では絶対に不可能だろう。思わず顔を上げると、私は再びトーマスと顔を合わせることになった。

ヘルメットを海底に置き、私は殺された男の空気パイプを調べ始めた。だらりとはっているのを追いかけ、すぐにはしを見つけ出すことができた。空気パイプはそこで切断されていた。

私は切断面を調べた。そしてため息をつかなくてはならなかった。弁カバーと同じようにパイプの切断面も強い力で押しつぶされ、引きちぎられていたのだ。

現代の潜水服とは違って、この時代の空気パイプは二重構造にはなっておらず、ちぎれたり気密が失われたりしてもクジラが潜水できなくなってしまうことはなかった。現代の空気パイプは、当時よりもクジラの肺の奥のさらに深い場所まで達しているからそういうことになってしまうのだが、この竜騎兵を殺し、空気パイプを引きちぎってしまった後でも、トーマスは何に困るどころかかえって自由の身になり、死体をここに残して立ち去ることができたのだろう。

「ねえあんた」気がついたときには、私はトーマスに向かって話しかけていた。動物と会話しようなどとはバカバカしいことなのかもしれないが、そうしないではいられない気分だったのだ。

トーマスはまだ私を見下ろしていて、隣にいるチビ介は何だかうれしそうに目玉をぐるりと動かしている。

「ねえトーマス」私は続けた。「ジャック・カーターの悪い噂は私

もいろいろ聞いているけど、何も殺してしまうことはなかったんじゃないの？」

チビ介が胸びれを伸ばし、私の肩に触れた。背中に乗れというつもりらしい。その通りにすると、まるで合図でもするかのようにチビ介は口から水を噴き出し、まわりの海ユリをさざなみのように動かした。チビ介の背中の上で、私はトーマスを見上げ続けた。

「三十年も前のことだし、私には関係のないことでもあるしね。まあいいわ。あんたがカーターのことが大嫌いだったというのはよくわかったわよ」

マッコウクジラは視力がとてもよい。だからヘルメットのガラス越しに私の表情を読み取ることができたのだろう。トーマスは満足そうに胸びれをパタパタと動かした。そして…

そしてトーマスは、ゆっくりと私に近寄ってこようとしたのだ。私はぎくりとした。あれだけ大きな身体なのだから、驚くのも無理はないと自分でも思う。それでもトーマスはまだ近寄ってこようとする。

とっさに手を伸ばしてチビ介の肌に触れ、私は鼓動の速さを確かめようとした。背中の上にいるのだから、動脈を探して腕を長く伸ばさなくてはならなかった。だが私の手は、目的を達する前に止まってしまった。チビ介と目が合い、そんな必要はないとわかったのだ。チビ介の目は明らかに笑っていた。

マッコウクジラの目玉はグレープフルーツのように大きく、深いしわのあるまぶたの中に埋もれている。しわの形は一頭一頭違うし、慣れてくると、目を見るだけでクジラの感情を読み取ることができ

るようになる。すでに私は、数年間にわたってチビ介を相棒としていたのだ。見間違えるはずなどなかった。

今やトーマスは、私の身体を真正面にとらえている。クジラやイルカの仲間はみなそうだが、音波を発する器官が額の内部にあり、レンズのようにして焦点を結ばせ、その音波でもってまわりの物体の形や位置を探ることができる。今は私の懐中電灯が光を発しているが、真っ暗な海中では、野生のクジラはそうやって物を『見て』いるのだ。

このときもトーマスは、そうやって私を見ていたのだろう。トーマスが発する音波を、私は身体全体でじんじんと感じることができた。身体がしめ付けられるとか、揺り動かされるというのとは違うが、それでも強力な感覚ではある。

水兵のはしくれだから、私も艦砲射撃（かんぽうしゃげき）を目にしたことがある。戦艦の巨大な砲が火を噴き、敵船へむかって重さが何トンもある砲弾を発射するのだ。その音の大きさと空中を伝わる衝撃波を想像してほしい。クジラの音波によって身体をなでられるというのは、艦砲射撃を目の当たりにしているときの感覚に似ているといえるかもしれない。肌に触れるのは、音というよりもまるで質量のある衝撃という感じで、圧力の下で身体がずんと震えるのだ。

今から思えば、トーマスは私の身体までの距離を正確に知ろうとしていただけなのだろう。もちろん私を捕まえて食べてやろうというのではなかった。ゆっくりとだがトーマスが口を開き始めていることに私は気がついていた。だがそれを恐ろしいとは感じなかったのだ。

マッコウクジラの下あごはボートのへさきのように細長く、白い

キバが行儀よく並んでいるところはヘアブラシに似ていなくもない。トーマスは口を開き、そのキバを見せ始めていた。

トーマスのように歯並びのよいクジラを私は一度も見たことがなかった。たいがいのクジラはキバの一本や二本は曲がっているもので、九十度横を向いてしまっていることだってある。チビ介もそうで、右あごの前から3番目がそうなっている。だがトーマスはそうではなく、まるで歯並びの見本のようにすべてのキバが同じ形と大きさでととのい、整然と並んでいるのだ。そして中央に、ピンク色をした巨大な舌が顔を出している。

ここまで読んだあなたは、この次にトーマスが何をしたと想像するだろう。私は再び驚き、その場から飛びのきかけたのだが、その意味にはすぐに気づくことができた。トーマスは口を大きく開け、私の目の前に舌をグイと突き出したのだ。

クジラの舌はとても大きく、店で売っている牛の舌がおもちゃのように思えるほどだ。その先端はピラミッドの頂上のようにとがっている。おずおずと手を伸ばし、そこを私はつかんだのだ。

竜騎兵たちの間では、この行為は『握手』と呼ばれていた。機嫌のいいとき、クジラはそれを求めることがあるのだ。

そうやって握手を始めたのだが、私も竜騎兵だし、クジラを前にしてそうそう驚いてばかりもいられない。いたずら心を起こし、突然その舌を強くつかんでやったのだ。力を込めて引っ張ってやったのだ。だがマッコウクジラに比べれば、私の身体などネズミほどの大きさでしかない。いくらがんばっても私の腕力などしれている。痛がりもせず、目を細めてトーマスは私を見つめ返した。チビ介がおもしろそうに身体をゆする。

手を離すとトーマスも舌を引っ込め、口を閉じた。その動きがいかにもゆっくりとしていて名残惜(なごりお)しそうなのが愛らしく感じられるほどだった。

トーマスとチビ介の間で、突然おしゃべりが始まった。周波数が高すぎて私の耳には聞こえないのだが、身体の向きを変え、もう少しで触れ合ってしまいそうなほど二匹は額を寄せ合っているのだ。そこから漏れてくる音というべきか、ときどきごく低い周波数が混じるせいなのか、潜水服の中にいる私にもその振動が直接感じられるほどだった。

トーマスのほうが、チビ介よりも大きな声で話しているようだった。ときどき感じられる振動の中にチビ介の声のほうが多く混じっているのは、身体の大きさに反比例して、トーマスのほうが高い音を立てているからかもしれない。

話されている内容が理解できるはずもなく、少しの間私はおいてけぼりにされている気分だったのだが、ついに二匹がコーラスを始めたときには本当に驚いた。

あれは本当にコーラスと呼ぶほかないだろう。もちろんメロディの中で並外(なみはず)れて低音の部分が途切(とぎ)れ途切れに私の耳に届くだけだったが、その音は寸分(すんぶん)の狂いもなく二匹から同時に聞こえてくるのだ。まるで二つの楽器が調子を合わせつつ、チューニングでもしているかのようだ。チビ介が基準になる音を出し、トーマスがそれに合わせようとしている。チビ介の手本に合わせ、トーマスが歌を習っているといってもよいかもしれない。

この歌合(うたあわ)せは数分間続き、やがて突然終わった。二匹が静かにな

る。

どうしたのだろうと私は耳をすませたが、やはり二匹とも黙ったままだ。だが突然トーマスが始めたのだ。

始めは少し焦点がずれているように思えた。しかしトーマスは身体をわずかに後退させ、音のレンズを調整し、もっとも効率のよい位置をすぐに見つけ出したようだった。

光と同じように、レンズを通して音も焦点を結ぶことができる。音楽堂や劇場はその原理を利用して設計され、聴衆が最もよい音を楽しむことができるように作られている。それと同じことを、この海ユリの森の中でトーマスは試みていたのだ。

自分の頭の中のことなのに、何が起こっているのか始めはまったく理解できなかった。それは混乱と名づけるのがもっともふさわしく、すぐに私の頭の中は、かんしゃくを起こした子供がおもちゃ箱をひっくり返したときのようになってしまった。箱の中に入っていた様々なおもちゃが勝手な方向を向き、何の秩序もなく乱雑に散らばっている。ブリキ製の自動車、鉛の兵隊、木でできた小さな馬、ボール紙の家、煙突のとれた機関車といったもの。

それらが何十も集まり、山を作り、床へむかってガラガラと崩れ落ちてゆく感じといえばいいかもしれない。

これはトーマスがやっていることだと私は気がついた。音波を使って、私に何かのイメージを伝えようとしているのだ。ヘルメットの分厚い金属やのぞき窓のガラスを通り過ぎ、私の頭蓋骨も突き抜けて、トーマスの声は私の脳の中心部で焦点を結ぼうとしていた。

生物学の本ならどれにでも書いてあることだろうが、何億年も前、まだ原始的な動物だったころから進化を続け、脳を発達させて、人類は現在の姿になっている。まるで粘土の小さな塊の外側に新しい粘土を付け足していくようにして、人間の脳は大きくなってきた。ということは、人間の脳の中心あたりには、原始的な動物だったころの脳が今でもそのまま残っているということだ。

人間の脳の外側は新しい部分で、内側へゆくにしたがって古くなってゆく。

もちろん、人類が過去にクジラだったことがあるわけではない。人間はクジラの子孫ではない。だがトカゲかネズミか知らないが、何億年か前には人とクジラが何か同一の動物だった時期がある。分厚く取り巻いている大脳の奥深くに、人もクジラもそのころの古い脳を今でも持っている。音波を使ってトーマスは、私の脳のその部分に話しかけようとしていたのだ。

水兵なら誰でも竜騎兵になれるというわけではない。私はたまたま竜騎兵に向いていたが、熱く薄暗い機関室でディーゼルエンジンの世話をしているときが一番楽しいという者もいる。甲板に出て潮風に吹かれるのが好きだという者もいる。六分儀（ろくぶんぎ）を使って星を見ているときが一番心が休まるという者もいる。そして私は、クジラの背中の上が一番楽しい。

人なら誰だって、まだ原始的な動物だったころの脳を頭蓋骨の内側に持っているのだが、特別私はその部分の働きが活発なのだろう。だからクジラたちとも気が合うし、ちゃんと指示をきいてももらえる。竜騎兵部隊の同僚の中にはこれがまったくうまくいかず、いつも苦労している人がいる。なぜ彼がクジラとうまくいかないのか私は不思議で仕方がなかったし、逆に彼は、なぜ私がクジラとこんな

にうまくやっていけるのか不思議で仕方がないそうだ。今から思えば、その秘密はこんなところにあったのかもしれない。

それはそうとトーマスのことだ。まるで映画館の映写機のように、トーマスは私の脳というスクリーンの上に、ある物語を映し出そうとしていた。

それはトーマスの一生の物語だった。５０年にもおよぶ一生だが、もちろん短く編集されて私の中へ送り込まれてきた。だが一瞬後にはそれが一気にはじけ、まるで頭の中で巨大な爆弾が爆発したような気がした。といっても不愉快な経験だったのではなく、絵本のページを開いたときのように、トーマスの一生分の経験が私の中で一気に広がったのだ。

6

いくらクジラでも、水中でいつまでも息が続くわけではない。せいぜい2時間ほどに過ぎないが、その2時間が終わる前にチビ介と私は水面に顔を出し、新鮮な空気を吸い込むことができた。

トーマスはすでに姿を消してしまっていた。水面近くを行きながら、カーターの死体の正確な位置を海図に記録しておかなかったことに気がついたが、どうでもいいことのような気がした。あんな古い死体のことなど、いまさら誰も興味を持たないだろう。

高速艇の音を追って、チビ介はゆっくりと尾びれを動かしている。きっと明かりという明かりを点灯させていることだろうから、もうすぐ水平線に見えてくるに違いない。やがて私の耳にもエンジンの音が聞こえてくるようになった。

懐中電灯のスイッチを入れ、高速艇へ向けて私は振り回し始めた。チビ介もキュッキュッと合図の鳴き声を発し始めている。きっとソナー手はすでに気づいていることだろう。と思っていたら、へさきのハッチを開くモーターの音が水の中に響き始めた。

指示を出し、私はチビ介を船内の水槽へむけて進ませた。海中で何があったのかをベスやジョーンズたちは聞きたがったが、私は口を閉じていた。チビ介の世話はジョーンズにまかせ、私はすぐにアップル大尉の部屋へむかった。

指揮官の部屋といっても、大きな船ではないからしれていて、小さな机のまわりにイスをやっと三つ並べることができるだけの広さしかなかった。艇長も待ちかまえていて、アップル大尉は私をイス

の一つに座らせた。私は海中で経験したことを話し始めた。

覚悟はしていたが、二人とも信じてはくれなかった。海ユリの森の中にカーターの死体を見つけたあたりでは「ほう」と目を丸くしていたが、トーマスとチビ介のコーラスまで来ると眉をひそめ、トーマスが私の脳の中に物語を送り込んできたと口にしたときには、もうまったく信じていない様子だったのだ。

「なあスミス」アップル大尉は口を開いた。「潜水服の調整はきちんとしてあったのか？　急な出撃だったからな」

「竜騎兵も潜水病にかかるのかい？」艇長が言った。

「たまにある」アップル大尉はうなずいた。「呼吸装置の調整がうまくいってなくて、酸素分圧が大きすぎたり小さすぎたりすることがあるんだ」

アップル大尉は手を伸ばし、私の顔に触れた。まぶたを裏返し、血液の色を見た。

「特に異常があるようには見えんが」と艇長。

「そうだな」アップル大尉も同意した。

「私は夢を見ていたわけではありません」私は言った。「ウソだと思うのなら、チビ介にきいてください」

「それができれば苦労はしないよ」とアップル大尉は笑い、あきれたような表情の艇長と顔を見合わせた。

「でも…」と私。

「まあいい。トーマスが送り込んできたという夢の内容をもう一度話せ。もっと詳しくだ」

「オレはついていけんよ」艇長はとうとう立ち上がってしまった。

「海軍の中で一番の変わり者は潜水艦乗りだと思っていたがな」

「どこへ行くんだ？」アップル大尉が顔を上げた。

「もう寝る。報告書はおまえが適当に書いておいてくれ。オレは関わりたくない」ドアを開け、いかにも疲れたというふうに首を振りながら、艇長はどこかへ行ってしまった。

「ふうう」バタンと閉じてしまったドアを見つめていたが、ため息をつき、アップル大尉は私を振り返った。

「あのう…」

「なあスミス。船乗りではあるが、あの艇長もしょせんは波の上の人間でしかない。海中で起こる奇妙な出来事については何も知らないも同然さ。やつは竜騎兵ではないからな。といっても、今おまえが口にしていることは、このオレにもほとんど信じられんが」

「でも本当なんです」

「おまえがウソをついているとは思わんさ。だが報告書にそのまま書くわけにはいかん。お偉方たちときたら、あの艇長よりももっと石頭だからな。しかし報告書のことはまた後で考えることにしよう。とにかく今は、トーマスが話してくれたことをもう一度話してくれ」

下を向いて床を見つめ、私は考えをまとめようとした。少しして顔を上げたが、口からはこんな言葉しか出てこなかった。

「そういっても、あまり話すことはないんですよ。５０年分もある長い物語だったけれど、もうほとんど忘れてしまいました。ほら、よく眠ったあとで朝になって目を覚ますと、長い夢を見ていたことは覚えているけれど、それがどういう夢だったのか内容までは思い出せないことがあるでしょう？　ああいう感じです」

「最近、オレは夢もほとんど見なくなったよ。働きすぎかな」

「少し休暇をとってはどうです？」

「そうだな、考えてみよう。トーマスが語った物語の内容だが、本当に何も覚えていないのか？」

「ええ、すみません」

「あやまることはないさ。報告書は適当に書いておく。後でサインだけしてくれ」

こうやってトーマスを追跡する旅は終わったのだ。本当にサインをしただけで、内容を読ませてもらってもいないのだが、カーターの死体を発見したことのみを記し、その他はすべて省略して報告書を作ったとアップル大尉は言っていたから、その通りだったのだろう。その後もお偉方からも誰からも、私は何一つ質問されることはなかった。

研修期間が終わり、ベスは特科学校へ帰っていった。私たちは本

当に親しくなり、それ以後も手紙のやり取りを続けるようになった。

7

ある場所に『潮風亭（しおかぜてい）』という小さなレストランがあり、竜騎兵指揮所からも近く、主人が元水兵だということで、海軍の制服を着ていれば料金を割り引いてもらえたので、私もときどき顔を出した。

店の中には海や海軍に関係のある絵や写真が飾られ、それを見ながら時間をつぶすのが私は好きだった。いつもと同じように私はその写真や絵を眺めていたのだが、なぜか突然、あっと声を上げてしまいそうになった。

思わずテーブルから立ち上がり、一枚の写真に近寄った。なぜそんなことをするのか自分でも理解できなかったのだが、顔を近づけて眺めた。

一分近くそうしていたと思うが、やはり自分でも理由がわからなかった。なんということのない普通の写真だったのだ。港の近くで撮影された白黒の古めかしいもので、木製の額の中におさめられ、壁に飾られている。写真の中央には貨物船があり、イカリを下ろして岸壁に接岸している。貨物の積み込み中なのかクレーンが腕を伸ばし、煙突からはうっすらと煙をはいている。

これがどういう船なのか、もちろん私は知っていた。海軍に所属する貨物船で、物資の輸送に使われていた。といってもかなり昔のことで、前回の戦争のときに国中の造船所で大量生産されたものだった。写真に目をこらし、私は眺め続けた。

「ジャネット、どうしたね？」

声が聞こえたので振り返るとこの店の主人がいて、コーヒーの入ったポットをかかえ、不思議そうに私を見つめているのと目が合った。

「ああ」私は笑って、写真を指さした。「この船って、どういう船なの？　なぜ写真がここに飾ってあるの？」

うれしそうに歯を見せ、主人はポットをテーブルの上に置いた。「思い出のある船さ。水兵になって私が最初に配属されたのがその船だったんだよ」

「へえ」

「私は１６歳だった。何も知らないひよっ子さ。戦争中だから人手が足りなくてね。海の知識なんか何一つないままその船に乗せられ、航海しながら勉強していった。機関室に配属されてね。機関長に怒鳴られながら、できの悪いエンジンのお守りを一日中したものさ」

「そうだったの。でもこの船は規格品で、たくさん作られたんでしょう？」

「４００隻だったかな？　とにかく大量さ。戦争の真っ最中だから数が必要で、同じ型の船ばかり作り続けたのだよ」

食事をすませ、家に帰ってベッドに入ったが、私はなかなか寝付くことができなかった。だが何が私を引き止め、眠りにつくことを妨げているのかはわからなかった。不愉快なのではないが胸騒ぎのようなものを感じ、明かりを消した真っ暗な部屋の中で、私は天井を見つめ続けた。

この胸騒ぎの原因が今日見たあの貨物船の写真だというのは間違いなかった。それは自信があった。だがどうしてなのだろう。

いくら考えても、あの写真は私を不安におとしいれるようなものではなかったはずだ。かつてどこにでもあった普通の貨物船を写したものでしかない。

考え続けたが何もわからないまま何時間もたってしまい、真夜中をすぎてからやっとまぶたを閉じることができた。そしてある夢を見た。

翌朝、竜騎兵指揮所へ出向くと、私はすぐにアップル大尉の部屋へ顔を出した。昨夜見た夢の話をすると、アップル大尉はまたまたいかにも信用できないという顔をしたが、私が海軍本省へ出かけることは許可してくれた。指揮所を飛び出し、電車に乗り、私は本省へ向かった。

潮風亭の主人が言っていた通り、あの型の貨物船は４００隻が建造されていた。海軍省の地下にある資料室で、それはすぐに確認することができた。戦争中に作られた船だから、敵の砲撃や魚雷を受けて沈没したものもたくさんあるに違いないと思っていたのだが、物資の輸送に使われるだけでいつも後方にいたためか、撃沈されたものは意外に少なく、たったの１７隻に過ぎなかった。

残りの３８３隻は天寿をまっとうしてスクラップにされたのだが、スクラップにされた連中には私は興味はなかった。資料室の中を歩きまわって、ホコリくさい書類のたばやファイルをあさり、私は撃沈された１７隻すべてのリストを作ることができた。

しかし私が探していたのは、サンゴ礁ができるような暖かい海で

撃沈された船だった。だから緯度の高い寒い地方や、深度の大きい大洋の中央に沈んだものは除外することができた。すると４隻が残ることになる。

この４隻については、撃沈された際の詳しい記録を読む必要があった。私のような若い者が５０年も前の記録を読みたがるなど資料室の係官は不思議そうな顔をしていたが、何も言われることはなかった。書類のたばを４つ受け取り、机に戻って私は読み続けた。

読み終わったとき、私は満足して息をつくことができた。この４隻のうち、船体が二つに分離して沈没したのは１隻だけだったのだ。あとの三隻は分離などせず、ちゃんと一塊（ひとかたまり）のまま海の底へ沈んでいった。

船体が分離して沈没した貨物船の沈没地点を確かめ、私はメモをとった。それは幸いなことにヒトリ国の領海内であり、そこへ行く船便も簡単に見つけることができるだろうと思えた。出かけて実地調査をするだけの休暇をアップル大尉はくれるだろうかと、私は考え始めた。

8

本省の資料室で得た成果を話すと、アップル大尉はしぶい顔をした。もっと調査する必要があると言うと、さらにしぶい顔をした。海軍として公式の調査をすることにはとても同意してもらえそうになかったので、休暇を取り、私は自分の費用と時間を使って現地へ出向くことにした。

チビ介は機嫌のよいクジラなので、2週間ほどなら私がいなくても待っていることができた。その点では本当に扱いやすいクジラなのだが、他の竜騎兵たちが親身に世話をしてくれることと、プールの中には他のクジラたちもいて、遊び相手に困ることはないというのも理由だったろう。

赤道直下ではないが、ウェル諸島は暑い場所にあり、小さな島が何十も集まってできていた。旅行用の荷物をつめたカバンを持ち、私は翌朝出発した。たかだか夢の真実を確かめるために1000キロ以上も旅する私を見て、アップル大尉はあきれ返ったような顔をしたが、人が休暇をどう過ごそうと勝手だから何も言わなかった。ただ机の上に足を上げて、何かの報告書を読みながら振り返りもせず、「オレにも何か土産(みやげ)を買ってきてくれよな」とだけ言った。

「はいはい」といいかげんに返事をし、私は港へ向かった。

『サンゴ海号』は岸壁でもう私を待っていた。中型の客船で、船室も広いとはいえなかったが、船足が速いというのが私がこの船を選んだ理由だった。船体は白く塗られ、汽船ではなく、ディーゼルエンジンを備えていたから煙突は小さい。そこから吐き出される煙も、黒くもくもくというのではなく、薄い色で立ち昇っている。

ウェル諸島までは二日半の旅だ。部屋にこもるようなことはせず、私は甲板や廊下を歩いたり、船員とおしゃべりをしたりして時間を過ごした。制服を脱いで私服で乗船していたから、私は海軍の人間には見えなかっただろう。

波の穏やかな航海だったので、船は予定よりもずっと速く走ることができ、ウェル諸島の姿が見えてきたのは翌々日の昼過ぎのことだった。かじを切り、港の入口へ向かって船は進路をとり始めていた。私はすでに荷物をまとめ、甲板に立っていた。

ピザのように平らで、えらくデコボコの少ない島だった。小さな丘はいくつかあるが、ほとんどは森や畑でおおわれ、白い屋根をした家々が港のまわりにかたまっている。本当に平らな島なので、これで大津波でもやってきたら島ごと飲み込まれ、何もかも持っていかれてしまうのではないかという気までしてくるほどだった。

だが私が島の風景を眺めていることができたのも、少しの間のことでしかなかった。不意に激しく汽笛を鳴らし、船が大きく右へかじを切ったのだ。せっかく到着した島から離れ、外洋へむかう方向になる。あまり突然だったので、甲板がぐらりと傾くほどだった。

女の乗客や子供らが小さな悲鳴を上げた。甲板の上にいた船員たちも緊張して周囲に目を走らせ、何人かがブリッジへ向かって駆け出す姿が見えた。

サンゴ海号はもう一度汽笛を鳴らした。甲板にいると耳が痛くなるほど大きな音に聞こえる。機関長がアクセルをいっぱいにふかしたのか、煙突から出る煙が真っ黒に変わった。床を通してエンジンの振動が感じられるようになる。

「あそこだ」
へさきのあたりで一人の船員が前方を指さしているのが目に入った。次に振り返ってブリッジを見上げ、口のまわりを両手でおおってメガホンのようにし、何かを怒鳴っていた。

へさきのあたりは乗客の立ち入りが禁止され、船員しか行くことができない。それは知っていたし、目の前には柵(さく)があって、注意書きの看板も目に入ったが、私は無視して乗り越えることにした。甲板の上をへさきへむかって駆けていった。

へさきにはすでに数人の船員が集まっていて、前方の海を見ながら早口で何かをしゃべっている。その中に顔見知りの船員を見つけ、私は話しかけた。

「どうしたの？」

その男は、私のために前方を指さしてくれた。「漁師の子供がボートに乗っていて、クジラの身体に魚網を引っかけてしまったらしい。投(な)げ網漁(あみりょう)でもしていたのだろうな。からみつかれたクジラは必死になって逃げようとしているが、網は外れず、馬が馬車を引くようにして、子供の乗ったボートを引っ張っているんだ。あれを見るんだ。まるで特急列車のようなスピードだぞ」

手すりをつかみ、私は身を乗り出して見つめた。たしかにそのとおりで、１５０メートルほど先にボートがいて、エンジンも何もない小さなものだが、誰がオールをこいでいるわけでもないのに、白い波が立つほどの速さで波の上を進んでいる。

ボートは外洋へむかっているが、波の静かな日だとはいえ外洋は

外洋だ。波が高くなり、いつひっくり返っても不思議はないほど左右に揺れ始めている。乗っているのは小さな男の子が一人だが、ボートのへりに必死でつかまっていることしかできない。もちろんここまで届きはしないが、悲鳴や叫び声が耳に聞こえるような気がした。

こういう場合の船員たちの手ぎわは驚くほど見事だった。誰が命令したわけでもないのに、小型のモーターボートを海に降ろす作業がすぐに始まったのだ。ブリッジは船速をいっぱいにあげ、少年のボートの追跡を続けている。

モーターボートはロープでつるされ、滑車を通して柱からぶら下げられている。結び目をゆるめ、それをそろそろと降ろしていくのだ。すでに男たちが二人乗り込んでいる。モーターボートが甲板の真横あたりまで降ろされたところでもう一人が乗り込みかけたが、腕をつかんで私は引き止めた。

「なぜだ？」日焼けしたたくましい顔つきの男が私をまっすぐに見つめ返した。

「私が行くわ」

「なぜ？」

「私は海軍の竜騎兵なの。クジラの扱いには慣れているわ」

困った顔をして男は同僚たちを見回したが、何人かがうなずいたので納得したのだろう。「よし、あんたが行け」と言い、道をあけてくれた。

私が乗り込むと、モーターボートを海面に降ろす作業が再び始まった。私以外には二人が乗り込んでいて、一人がかじを持ち、もう一人はエンジンをかける用意にとりかかっている。

水面につくと、白い煙をはいてモーターボートのエンジンが動き始めた。右にかじを切り、サンゴ海号のそばをさっと離れていった。

小さくてもスピードの出るモーターボートだった。見上げるようだったサンゴ海号はすぐに遠くなり、荒くなりつつある波を飛び越えながら私たちは進んだ。幸いなことにクジラは疲れを感じ始めているようで、ボートを引くスピードが遅くなりかけている。もうすぐ追いつくことができるだろう。

額の上に手をかざし、私は波の下を見透かそうとした。息をつぐため、不意にクジラが水面に大きな背中を出した。海の色と同じ濃いブルーの肌をしている。頭の上には小さなコブのようなものがいくつもある。ひらりと一瞬、胸びれも水上に姿を現したが、飛行機の翼のように長く見事なものだ。

「あれはなんというクジラだ？」船員の一人が言った。

「ザトウクジラ。南の海に住むおとなしい種類よ」私は答えた。

「おとなしいもんか。ボートを引くあの力を見ろよ」

「あれは、網に驚いてパニックを起こしているだけよ」

「あの子供を食っちまうつもりじゃないのかい？」

あきれ返って、私は船員を振り返った。「ザトウクジラはそんな

ことはしないわ。口の中には歯だってないんだもの。小エビやプランクトンを食べるだけのおとなしいやつよ」

「あの子供をどうやって助けるんだね？」もう一人の船員が言った。

私たちは、もうかなりボートに近づいていた。すぐに平行に並ぶことができるだろう。だが波のせいで揺れが激しく、子供をこちらへ乗り移らせることはできそうにない。子供も私たちに気づき、真ん丸な目で見つめている。

ザトウクジラの尾びれはまだ動き続けている。だが突然その動きが速まったことに気がついた。速度が上がり、網をつなぐロープがぴんと伸びてボートはさらに引っ張られ、私たちから離れていこうとしている。

「どうなってるんだ？」

「モーターボートのエンジン音に驚いたのだと思う。ものすごく臆病なクジラだわ」

「どうするね？」

私は男たちを振り返った。「こちらからあのボートに乗り移って、あの網を切るのね」

「だがこの揺れでは、乗り移るのはとても無理だぞ」

それには私も同意するしかなかった。モーターボートのエンジンはすでに全開になっている。本当に大きく揺れるので、船べりをつかんでしゃがんでいるのも難しいほどだ。床の上にぺたんと座り、

私は靴を脱ぎ、靴下も乱暴に引っ張って、はだしになった。

「どうする気なんだね？」

男たちを見上げ、私は最大級の笑顔を作った。人を説得し、納得させ、いうことをきかせたいとこれほど強く思ったことはこれまでの人生で一度もなかった。一生のお願いというところか。

「なあ、どうするんだい？」男たちは言った。

私は答えた。「このモーターボートを先回りさせて、あのクジラの鼻先で私を海の中に落としてよ。モーターボートが揺れて、事故で転落してしまったという感じでね」

「あんたは海に入るのかい？」

「海に落ちたふりをするのよ」

「それで？」

「それでうまくいくかもしれないわ」

「何がどううまくいくってんだい？」

私はもう一度微笑んだ。「説明している暇はないわ。うまくいってもいかなくても、後で私を拾い上げにきてね。当てにしてるわよ」

意味はわからなかったに違いないが、男たちはとりあえず納得してくれたようだった。左に向かってモーターボートのかじを切り始めた。海流に押されて、クジラとボートは北へ流され始めている。

丸くカーブを描きつつあるのだが、それをまっすぐに突っ切って、私たちは前へ出ようというのだった。

あることを思いつき、私はかじを持っている男を振り返った。よいアイディアのような気がして、私は上着を脱ぎはじめながら言った。「あんたの上着を貸してよ。私はそれを着て海に落ちるわ」

「どうして？」男はきょとんとした顔をした。

「あんたの上着は青い色をしているからよ。私の上着よりはよっぽどクジラの赤ん坊に近い色をしているわ」

「クジラの赤ん坊？」

「ゴチャゴチャ言ってないで早く脱ぎなさい。もうすぐクジラの前へ出るわ」

頭をめぐらせて海面を眺め、男もそれに気がついたようだった。モーターボートはクジラの鼻先に近づきつつある。かじから手を離し、男は急いで上着を脱ぎ始めた。

モーターボートのへりを乗り越え、タイミングをはかって、私は海へ身をおどらせた。放物線を描き、派手にしぶきを上げて落ちていったに違いない。そうしながらもちろん目は開いていた。水に入ってすぐ、不自然に見えないように少しだけ首を動かし、私はクジラの姿を探した。

いた。１００メートルほどのところだ。まっすぐこちらへ鼻を向けているが、私の存在に気がついているかどうかはわからない。網はピンと伸び、相変わらずボートを勢いよく引っ張っている。

母親の胎内(たいない)から生れ落ちたばかりの赤ん坊クジラは、どんな姿勢でどんな泳ぎ方をするのだろうと、私は頭のすみで考え続けていた。だが見たこともないのだから、想像でやるしかない。左右の足をそろえ、不器用に振り回してみることにした。胸びれのつもりになって、両腕もバタバタさせた。

役者としての自分の技量には、私もいささか疑問を感じざるを得ない。目玉の動きでわかったのだが、クジラは私に気づいたようだった。進路を少し変え、わきを通りぬけようとしている。１５メートルもないところだが、立ち止まる気配はない。

これ以上クジラを怖がらせないため、モーターボートは少し離れ、円を描きながら見守っているはずだった。私の耳にもエンジンの音はしっかりと届いている。

もうクジラは半分以上通り過ぎ、あとは遠ざかっていくだけだ。泡を巻き込みながら白い波を立てるボートの底も見ることができる。

私はがっかりした。作戦は失敗だったのだ。後はもう、無理をしてでも何とかあのボートに乗り込むしか方法はない。だがクジラが違う動きを見せたのは、その瞬間のことだった。やはり気になるというふうに、身体を曲げてかすかに私を振り返ったのだ。もう一度私に視線を向けたことが目の動きでわかった。

私はとてもうれしかったが、喜びをおもてに現さないように注意していた。いかにも生まれたばかりのクジラに見えることを期待して、手足を不器用に動かし続けた。

もちろん私の演技よりも、借りたブルーの上着が効果的だったの

だろう。クジラはより深く頭を曲げ、胸びれを動かしてカーブを描き、ついに私のほうを向いたのだ。引きずられてボートも傾き、ひっくり返りそうになったが、何とか持ちこたえた。

クジラは近づいてきて、コブだらけの頭を私に触れさせ、ちょんと上へ向けて押し上げてくれた。「何をしている？　空気のある水面はあっちだよ」というつもりなのだろう。

魚とは違い、クジラは水中では呼吸ができない。生まれたばかりの赤ん坊クジラももちろんそうで、母親の身体から出た直後、すぐに水面に背中を出すことができないとおぼれてしまう。

だが、生まれたばかりの赤ん坊がいつもそうできるとは限らない。そういう時、そばにいた大人のクジラが手助けをし、水面まで連れていってやる姿がときどき目撃されていた。私はそれをねらっていたのだ。

私はすぐに水面へ顔を出すことができた。自分の身体にからみついている網のことは気になるが、それ以上に私のことが気になるという表情でクジラがこちらを見ているような気がした。とっさに目を走らせ、私は網のからみつき方を調べた。

どうやらあのクジラは、網の中央へまともに頭を突っ込んでしまったようだった。頭と首のまわりをしめつけられては、さぞかし驚いたことだろう。メチャクチャに暴れ、網はほとんど切り裂かれてしまった。だが一部が残り、それがクジラの腹部にベルトのように巻きついているのだった。切り離すのは難しい仕事ではなさそうだった。

私はさっと泳ぎ始め、ズボンのポケットからナイフを取り出した。

それを見てクジラはひどく驚いたかもしれない。だが何をする余裕もなかっただろう。腹の下に潜り、何秒もかからずに私は網を切ってしまうことができた。

身体を押さえつけていた力が突然なくなったので、クジラはきょとんとしている様子だった。おまけに赤ん坊クジラだと思っていたものが、あっという間に人間の姿に変わったのだ。

マッコウクジラのように深海で獲物を追う必要があるクジラは別だが、浅い海にいることが多いザトウクジラのような連中は、もちろん目が悪いというのではないが、視力がそれほど発達しているわけではない。視力よりも聴力でまわりの様子を探っている。それにマッコウクジラであれば、潜水艦のソナーのように音を発して私の身体を調べ、「あれはクジラの赤ん坊ではなく人間だ」と知ることができただろうが、ザトウクジラにはそんな能力はない。

息を吸うために私が再び水面に顔を出したときには、背中を向け、ザトウクジラはこの場から泳ぎ去ろうとしていた。深く潜るために、尾びれの先を波のうえ高く見せた。長い胸びれを左右に広げるザトウクジラの後ろ姿は、飛び去ってゆく大型飛行機のような眺めだった。

9

子供はすぐに助けられ、私もモーターボートに拾い上げられた。ボートを引き、モーターボートに乗ったまま、私たちは直接港へ入ることになった。サンゴ海号はあとについて、ゆっくりと接岸した。疲れていたので私はすぐにホテルへ行き、シャワーを浴びてベッドにもぐりこんだ。

翌日から、例の貨物船の調査にとりかかった。沈没場所は島の裏側のひとけのないあたりで、陸路ではうまく行くことができなかった。大きなガケがあり、その下に広い砂浜があるのだが、登山道のような細い道があるとはいえ、このガケの上り下りが大変だったのだ。私はボートを借り、海にこぎ出た。大きなものではないが、マストと帆を取り付ければ外洋へ出ていけるだけの大きさがある。先日の子供が乗っていたような小さなものではない。

貨物船の姿は、遠くからでも見ることができた。写真で見た通りの真四角な姿だが、今はペンキもはげ、サビの塊のように真っ赤になっている。崩れて海の中へ消えていきつつあるのだろう。

船体はきれいに真っ二つに折れていた。この島の沖合いで敵の潜水艦に出会い、魚雷攻撃を受けたのだ。船底に穴が開き、浸水が始まったが、船体を残すため、船長はこの砂浜に座礁（ざしょう）させることに決めたのだ。エンジンを全開にし、へさきから突っ込んでいった。

もし砂浜にうまく乗り上げることができれば、修理されて戦線に復帰することができたかもしれない。だが運悪く、その手前の海中に大きな岩が隠されていたのだ。船はまともに衝突し、さらに大きな穴を開けた。その衝撃に耐えることができなかったのだろう。船

体はきつく折れ曲がり、大きな音を立てて、ついには引き裂かれてしまった。そうやってあの場所に沈没したのだ。

だが浅い海だから船の上半分は今でも水面に顔を出し、こうして眺めることができるわけだった。

沈没船へむかってボートをこぎ寄せながら、もう一度私はメモを確かめた。間違いない。今夜は満月になる。真夜中には大きな月がこの船を真上から照らすことだろう。私が急いでこの旅に出てきたのは、満月の夜にこの場所にいたいということが理由だったのだ。

ボートをつけることができる場所を探すのに少し時間がかかってしまった。私は沈没船のまわりをこぎまわったのだが、海へむかって斜めに落ち込んだ甲板を見つけることができた。少し急だが、あそこなら荷物を持って登ることができるだろう。

甲板に足を一歩乗せると、何十匹ものフナムシの群れがさっとあちこちへ逃げていった。何十年にもわたってここは彼らの楽園だったのだろうが、そこへ私という侵入者がやってきたわけだ。もうしわけなく感じないわけではなかったが、少なくとも今夜一晩は我慢してもらわなくてはならない。

荷物を広げ、寝る場所を作り、私は船の中をひとまわり見て歩くことにした。

戦時中の急造品だが鋼板は分厚く、質のよいものが使われていた。サビに包まれて薄く、弱くなってはいるが、私の足がつきぬけたり、屋根が崩壊して落ちてくるというようなことは起きそうにない。風も弱く、海が荒れているわけでもなく、ホテル並みとはいわないが、一晩過ごすだけならどうということはないだろう。

ギラギラというほどではないが、太陽は甲板にまっすぐ照りつけ、暑くてしょうがなかった。夕暮れまでの時間がとても長く感じられたが、いざ太陽が傾き、水平線に近づくとすべてが色に染まり、息をのむほど美しくなった。サビの塊のようなこの船までが金色に変わり、真新しい銅版でできているかのように輝きはじめたのだ。このまま魔法の力で浮かび上がり、空の上を漂い始めても不思議はなく思えてきたほどだ。何秒かの間、そうやって空中を揺られながら世界を旅する自分の姿を空想したりした。

私のことが怖いのか、フナムシたちはあれ以来一匹も姿を見せていなかった。日が沈んで真っ暗になり、ほんの少しの間眠るだけのつもりでいたのに、毛布にもぐりこんで気がついてみると何時間もたってしまっていた。月はすっかり高く上り、時計のように丸い顔をして私をまっすぐに見下ろしているではないか。

毛布をはねのけ、私は甲板に立ち上がった。手すりに近寄り、さび付いて弱くなっているはずなので体重をかけないように注意しながら、海を眺め渡した。

期待はしていたが、確信があったわけではない。そんな予感のようなあやふやなものを頼りにこんなところまでやってくるなど、なんと無謀なのだろうという気は自分でもしていたが、私の行動は無駄ではなかったようだ。この船からいくらも離れていない海中に、私はトーマスの姿を見ることができたのだ。波の上にわずかに背中を出して漂いながら、月の光をあびていた。

トーマスも私を待っていたのだろう。視線を合わせるために身体をかたむけ、水面に顔を突き出した。何メートルかの距離を置いて、私たちは見つめ合うことになった。

トーマスの姿はあのときのままだった。額の上には大きな接続装置が今でもついている。泳ぐ邪魔にならないように流線型のデザインにはなっているが、それでも私の両腕を使ってもかかえきれないほど大きく重いものだ。トーマスの胸のまわりには、ベルトも巻かれたままになっている。ジョーンズがつながれていたクサリも、まだそれにぶら下がっている。

海ユリの森の中でトーマスから見せられた夢の一部分を、私は再び鮮明に思い出すことができた。トーマスは子供時代をこのあたりで過ごしたのだろう。もう５０年も前のことで、おそらく満月の夜の出来事だったのだろうが、彼はこの船が撃沈され、沈没する瞬間を目撃していたのだ。

魚雷の爆発音を聞きつけ、子供らしい好奇心で見物にやってきたのだろう。そして偶然、この船が座礁し、船体が真っ二つに引き裂かれる瞬間を間近に見たのだろう。そのとき船体の四角いシルエットが、トーマスの心に深い印象を残したのだ。それは、夢を受け取った私にとっても同じだったのだろう。だから潮風亭で写真を目にしたとき、私は「あっ」と思い、思わず立ち上がったのだ。

カバンの中から懐中電灯と工具を取り出し、私は水際へ降りてゆくルートを探した。昼間荷物を引き上げるのに使った斜めの甲板が、うまい具合に海にむかって突き出していた。プラットホームのような形で、トーマスも簡単に近寄ることができるだろう。波打ち際で待ちかまえていると、トーマスはすぐにやってきた。

あまりに頑丈（がんじょう）すぎてナイフでは歯が立たないので、私はノコギリを使って、胸のベルトの切断に取りかかった。両腕の力をいっぱいに使っても少しずつしか切り進むことができず、時間がかかったが

とうとう切り離し、トーマスを自由にしてやることができた。ベルトは水に浮き、一瞬波にさらわれかけたが、クサリの重みに引かれてすぐに海底へ沈んでいった。

ノコギリを置き、私は別の工具を取り出した。次はトーマスの身体からあの接続装置を取り外してやることにしたのだ。だがこの装置はパイプ状に長く伸び、先端はトーマスの肺の奥深くへと達している。大きな外科手術をしない限り完全に取り除くことはできず、私にやれるのはおもてに見えている部品をいくつか取り外してやることだけだったが、それでも１００キロ近くは軽くなるはずだった。

ネジの種類が普通とは違うので、この作業には特殊な形の工具が必要になったが、私はちゃんと持ってきていた。竜騎兵指揮所の中ならどこにでも転がっているものなので、私が持ち出しても、誰にも気づかれることはなかっただろう。この工具を使ってネジをゆるめ、私は接続装置を解体していった。

トーマスはおとなしく私に身体を預けていた。解体が進むにつれ、部品がポトンポトンと海へ捨てられていくのだ。その音はトーマスの耳にどのように響いたことだろう。

すべての解体が終わるのには２０分ほどかかった。装置が取り外されても、トーマスの額には金属製の大きな皿のような形をした基部が残ってしまうが、これはどうしようもなかった。ここから先は外科手術が必要になる。

いかにもせいせいしたという様子で、トーマスは頭を左右に振った。口を少しあけて、舌まで見せてくれた。それから身体の向きを変え、尾びれの先で水をポチャンとはじいた。どうするつもりなのだろうと思っていると、そのままゆっくりと身体を沈め、姿を消し

てしまった。しばらくの間私は海面を見回していたが、もうトーマスはどこにも見えなかった。

トーマスに会うことは二度とないだろうと私は思っていた。そう思いながら再び毛布にもぐりこんだのだが、それは早合点（はやがてん）だったようだ。

早合点といえばもう一つある。フナムシたちのことだ。フナムシたちは私のことが怖く、どこかへ逃げ去ってしまったのだと思っていた。だが私は、彼らの神経を甘く見ていたようだ。夜が明けて太陽が昇り、最初に差し込む光で私は目を覚ましたのだが、そのとき何匹かのフナムシがさっと駆け出し、甲板の上を遠ざかってゆく姿が見えたのだ。あのスピードと進行方向からいって、少なくとも何匹かは眠っている私のごく近く、おそらく私の身体の上に登って、何かおいしいものでもないかと探っていたに違いない。

だが私は驚いて飛び上がるようなことはしなかったし、手近なものを投げつけて、二度と近寄る気を起こさせないようにしようとも思わなかった。竜騎兵指揮所でもそうだが、フナムシなどおなじみの顔でしかない。

毛布から出て大きく伸びをし、私は朝食のしたくに取りかかった。コーヒーをいれ、パンと一緒にゆっくりと味わった。甲板の上を歩き回って、景色を眺めながら食べたのだ。決して行儀がよいとはいえないが、ここにはそんなことをとがめる人はいない。

朝食がすむと荷物をまとめ、私はボートの用意を始めた。町に帰り、今夜からはホテルで過ごすのだ。やるべき仕事は終わったわけだし、難破船の上で二晩も過ごすのは、いくら私でもくたびれてしまう。

ボートの準備はすぐにすんだ。荷物を積み終えて自分も乗り込み、私はロープをほどこうとしていた。波を受けて、ボートはゆっくりと揺れている。オールの先でぐいと押して、私は貨物船から離れていった。だがロープはきちんとまとめられてはおらず、ボートのへさきに丸めて引っかけられたままになっている。貨物船からもう少し離れてから、きちんとしばっておくつもりでいたのだ。

沖合いからやってくる波を受けて、ボートが少し強く揺れた。荷物がくずれたり、バランスを失ったりするほどではなかったが、横向きに傾いたのだ。今から思えばトーマスは水中から様子をうかがい、この瞬間を待っていたのだろう。ロープの先がぱたりと水の中へ落ちた。

もちろん大したことではない。波の上でただよい始めているのを拾い上げればよいだけのことだ。だが私が手を伸ばそうとした瞬間、トーマスの巨大な身体が水中から現れ、ずらりと並んだ歯を見せて、ロープの先をくわえていってしまったのだ。

まるで海ヘビのようにしゅるしゅると動き、ロープはすぐにピンと伸びてまっすぐになった。先日の漁師の子供のときと同じだ。グイと引かれ、私のボートは波の上を走り始めた。

あのザトウクジラはそれほど大きなやつではなかった。それでもあれだけのスピードを出すことができたのだ。トーマスはあいつよりもはるかに大きいのだ。

もちろん始めは私もひどく驚いた。しかし水中からチラチラと振り返り、トーマスが私の様子を探っていることはなんとなく感じることができた。だから意味に気づき、私はボートの床に腰を落ち着

けることができたのだ。転がり落ちてしまわないように荷物の様子をもう一度確かめ、ボートと波のやわらかな揺れに身をまかせることにした。

運よく最初の夜に顔を合わせることができたからよかったが、沈没船の上で何日か待つことになるかもしれないと、私もはじめは覚悟していた。だから数日分の水や食料を用意していたのだ。トーマスは元気よく、ぐんぐんと私のボートを引き続けている。何ノット出ているのか正確にはわからないが、へさきが波を立て、振り返ると後ろに白い泡の筋を引いているのがわかる。

長い旅になるのかもしれなかった。予備の毛布を使って、私はボートの上に臨時の屋根を作った。こうすれば日に直接当たらないですむ。

日が高くなって正午になり、さらに進んで夕方が近くなっても、トーマスはまだ泳ぎ続けていた。途中で何度かスピードをゆるめることがあったので、目的地に着いたのかと思ったのだが、ただ休憩しているだけだったようだ。少しすると再び泳ぎ始め、ボートを引き続けた。

とうとう目的地に到着したのは、真夜中近くのことだった。六分儀（ろくぶんぎ）で星の角度をはかり、時計を見て、自分がいる位置を海図の上で調べることができた。ヒトリ国の領海と公海の境目近くで、ちょうど大陸棚（たいりくだな）が終わり、海底が深海の平原へ向かってすとんと落ち込み始めるあたりだ。

ほぼ一日走り続けたのに意外に少ししか距離をかせいでいないことに拍子抜（ひょうしぬ）けしたが、すぐに理由に気づき、私はあきれるというよりも感心してしまった。私と二人きりの旅を誰にも邪魔されないよ

うに航路を避けて、トーマスは大きく迂回(うかい)しながら進んでいたのだ。そういえば旅の途中、船も飛行機もまったく見かけなかったことを思い出した。

身を乗り出してぐるりと見回したが、もちろん陸地などは見えなかった。船舶の影もなく、トーマスと私は本当に二人きりのようだった。雲がないので、ぼうっと白い天の川が空の半分をおおっている。昨夜の今日だから、ほとんど欠けていないまだ満月といっていい月が頭の上に出ている。

トーマスがすでに口から放しているので、ロープは波の上にプカプカと浮いている。水中から私を見つめながら二度ほどボートのまわりをぐるりと回っていたが、突然決心したのか、トーマスは深く潜水する用意を始めた。

そのためにはまず、息を深く吸うのだ。呼吸口からゴーゴーと巨人のイビキのような音が聞こえてくる。この深呼吸の長さで、マッコウクジラがどのくらい深くまで潜るつもりでいるのかを推測することができる。深く潜れば潜るだけ大量の酸素が必要になるから、それだけの空気をあらかじめ吸い込んでおかなくてはならないのだ。

時計を見ながら秒数を計り、回数も数えた。トーマスはこれから少なくとも１５００メートルは潜るつもりらしいと私は見当をつけた。潜水艦はもちろん、潜水服を着た竜騎兵がどうがんばっても行くことのできない深さだ。その深さには何が存在し、どのような景色が広がっているのか、見たことのある人間は一人もいない。

深呼吸をすませ、トーマスは身体をおどらせた。頭を深く沈め、棒のようにまっすぐ逆立ちになったのだ。だから身体の後ろ半分や尾びれは、水面高く垂直に立ち上がることになる。まるで水の上に

生えた塔のような眺めだが、波を巻きながらすぐに水中へ消えてしまった。誰かが投げ込んだ石ころのように、海底へ向かってまっすぐに潜っていったのだろう。後に残るのは、ほんの少しの波ばかりだ。

あっという間に独りぼっちになってしまったわけだが特に不安を感じることもなく、ボートのへりに頬(ほお)づえをつき、私はトーマスの帰りを待っていることができた。耳に聞こえるのは、わずかな風と波の音だけだ。

トーマスが戻ってきたのは、1時間近くたってからだった。退屈なのでボートの床にあおむけになり、うとうとしかかっていたのだが、波を割って突然大きな頭を突き出し、トーマスはゴボッと大きく息をはいたのだ。あまりに勢いよくだったから、霧のようになったしぶきが私のところまで飛んできたほどだ。

月の光の下で、トーマスの白い身体ははっきりと浮かび上がって見えた。再び私を見つめ、それがまるで甘える子犬のようなしぐさだったから、額でもなでてほしいのかと思ったのだが、違っていたようだ。トーマスが口に何かをくわえていることに気がついた。

身を乗り出し、私はのぞき込んだ。トーマスは動かず、そのままの姿勢を続けているので、腕を伸ばし、手に取ることができた。

指先にガラスの手触りを感じて、驚かなかったといえばウソになる。手の上に乗せ、月の光にかざして眺めたのだが、本当にガラスでできているとわかって、もう一度驚いた。やわらかい舌の上に乗せて、壊さないように大切に運んできてくれたのだろう。

透き通ってはいるが薄青いコバルト色に輝き、大きさは私の手の

ひらに乗るほどだ。やわらかいカーブで形作られ、表面には水玉のような模様がいくつかある。考古学のことは何も知らないが、子供のころ博物館で似た形のものを見たことがあるような気がする。

きっとまだキリストが生まれてもいない時代に作られたものだろう。海上を運ばれていたのが何かの理由で船ごと沈み、今日まで水の中にあったのだ。それを１５００メートルの底から拾い上げてきてくれたのだ。

それだけ長い間海底にあったとは思えないほどつるつるしていて、まるで磨かれたように美しいが、海流の関係でこのあたりの海水にはミネラルが足りないのでプランクトンが少なく、だからサンゴのようなものが付着することもなく、深すぎて太陽の光が届かないから、海草が生えてしまうこともなかったのだろう。

月の光にかざし、私は眺め続けた。たまらなくなって懐中電灯もつけた。おそらくボウルとして作られたものだろうが、本当にキズ一つなく、光はその内部をまっすぐに通り抜け、断面で屈折（くっせつ）し、きらきらと輝いていた。しかも全体がぼんやりと海のようなブルーなのだ。こんなに美しいものは見たことがないような気がした。

気がつくとトーマスが再びロープをくわえ、泳ぎ始めるところだった。私を陸地へ連れ戻してくれるのだろう。ボートのへさきも波を切り始めている。

もう少しの間私はボウルを眺めていたのだが、ため息をつき、毛布で何重にもくるんでカバンの中へ大切に片付けた。前を向き、私はトーマスの背中を眺めた。マッコウクジラは背びれが小さく、あの大きな身体なのに、もうしわけのようにちょこんと突き出しているのに過ぎない。子ブタのしっぽのようにかわいい眺めだといつも

思う。

ボートのへりに寄りかかり、手を伸ばして私は波をもてあそび始めた。一仕事すませた気分で、トーマスもリラックスして身体の力を抜いているのだろう。ザブンザブンと波を立て、ときどきしぶきが私のところまで届く。海図を見ればわかることだが、ここは本土からも遠くはないのだ。急ぐ旅ではない。白いマッコウクジラに引かれ、ボートは波の上をゆっくりと走り続けた。

（終）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4320e/

海の竜騎兵３

2010年10月11日04時24分発行